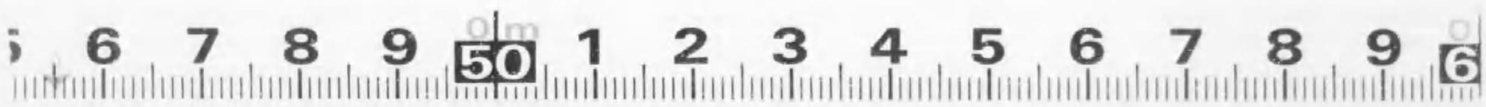
527
71



U.7.11

理科物語

太陽と月

松平道夫著

岡書院發行

14. 3. 30
内交

皆日蝕の時に寫したる太陽の表面

口繪の一

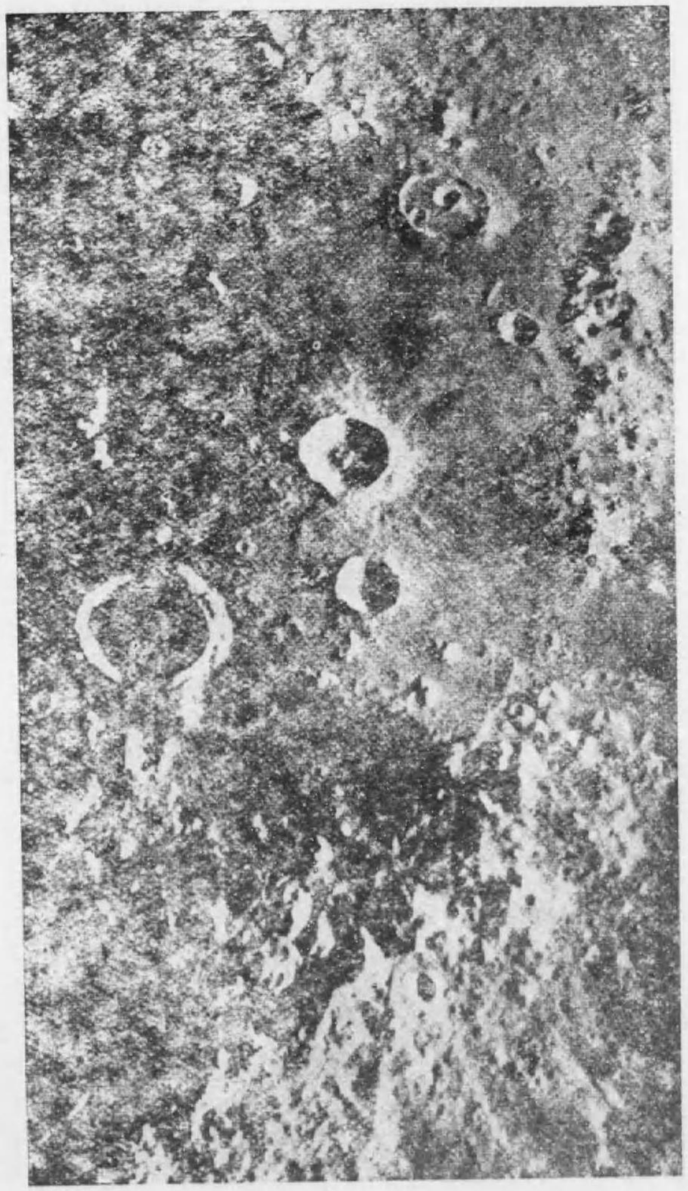
527-71

理科物語

(2)

太陽と月

(一) 月と兎
(二) お日様とお月様の喧嘩
(三) お月様と着物
(四) 鬼神の悪戯
(五) 生命の源
(六) 夕の散歩
(七) 雷の話
(八) 青い空
(九) 風と雲と雨の話
(十) 夏と冬



月の表面

口絵の二

「理科物語」に就て

皆さんは「理科と云ふものは理窟ばかりで面白くない」と思はれるでせう。けれども理科と云ふものは私たちの知らない新しい知識を與へてくれるものですから、味へば味ふ程いろ〳〵な興味が湧いて來るものです。一つの新しい知識が增した時、それを知らなかつた以前のことを思ひ出すと、實際滑稽としか思はれないことがあります。今南洋やアメリカあたりの野蠻人を東京の眞中へつれて來て御覽なさい。そして自動車や電車や汽車がどうして走つたり、電燈がどうして點いたり、又は電話でどうして話しが出來たりするかと思ふかと聞いて御覽なさい。その答へは屹度皆さんを抱腹絶倒させずには置かないでせう。

私はこの「理科物語」に於てさう云ふ滑稽な話も載せませう。さう云ふ話は皆さんが未だ本が讀めなかつた幼い時分に不思議なものを見て想像した考へとよく似てゐて面白いでせう。そして昔の人はさう考へてゐたか本當はかうだとお敎えしませう。そして知

らず識らず皆さんの理科に對する趣味と理解とを養つて行きませう。かう云ふ意味で「理科物語」は高尙な童話集でもあり、一つの物語集でもありそれと同時に最も趣味ある科學の本であります、どうぞ皆樣の御愛讀を祈つてをきます。

杉並町にて　　松平道夫　しるす

第一編　星の話（恒星、流星、彗星の話）
第二編　太陽と月（太陽、月、氣象の話）
第三編　地球の話（山、河、海、鑛物、生物の話）
第四編　ラヂオの話（新世界を造る無線電話）
第五編　發明の話（種々有益な發明の話）
第六編　化學の話（變化限りなき化學の話）

理科物語（2）

太陽と月

——目次——

月と兎……（七）
（一）十五夜の月……（七）
（二）深切ごつこ……（一三）
（三）食物を求めて……（二一）
（四）兎の決心……（二八）
（五）お月様の情……（三三）
お日様とお月様の喧嘩……（三七）
（一）十六夜……（三七）
（二）梟と烏の賭……（三八）
（三）どっちが大きいか……（四七）
（四）お日様とお月様とが顔を合さない譯……（五六）
お月様と着物……（六一）
（一）寒いお月様……（六一）
（二）お月様の歌……（六五）
（三）お月様の不平……（六九）
（四）太つたり痩せたりする譯……（七一）
鬼神の惡戯……（七六）
（一）今日は日蝕……（七六）
（二）鬼神の憤懣……（八三）
（三）日蝕と月蝕との起る譯……（九〇）
生命の源……（九六）
（一）夏休み……（九六）
（二）地引網……（一〇〇）
（三）太陽とはどんなもの？……（一〇五）
（四）太陽の大きさ……（一〇九）
（五）太陽がなくなつたら……（一一四）
夕の散歩……（一二一）
（一）夕の散歩……（一二一）
（二）地球と兄弟星……（一二四）
（三）火星の生物……（一三一）

雷の話……（一三九）
（一）魚釣り……（一三九）
（二）雷だ！……（一三九）
青い空……（一五八）
（一）やあ晴れた！……（一五八）
（二）雷の研究……（一五九）
（三）青い空……（一六六）
風と雲と雨の話……（一七四）
（一）夕の御馳走……（一七四）
（二）風の話……（一七九）
（三）雲の話……（一八七）
（四）雨の話……（一九三）
夏と冬……（一九七）
（一）どうして夏は暑いのでせう……（一九七）
（二）夏は暑い譯……（二〇一）
終り

理科物語

太陽と月

松平道夫著

月と兎

五夜の月

三郎さんの町にも盆が來ましたので町の人々は皆騒いでをります。鎭守の森の方からは絶えず間もなくドコドン〳〵と太鼓の音が手に取るやうに聞えて來ます。

三郎さんはその太鼓の音に誘はれるやうに障子を開けて縁側に出て、見ます

と、恰度東の山の上にまん丸い十五夜のお月様がぬつと顔を出されたところです。そのお月様はいつもより大きく、そして赤く見えました。

「何テ大きなお月様だらう。」

と三郎さんはぢつとお月様を見詰めました。お月様は段々東の空高く昇つて行きます。

「おゝ今夜は十五夜の月だね。」

と三郎さんの後にはいつの間にかお父さんが立つてをられました。

「本當にいゝお月様ね。僕お月様の童謡を唄つて見ませうか。」

三郎さんはさう云つて歌ひ出しました。

海のあなたに出た月は
今夜は紅色
茜いろ
父さま若しやと出て見れど
お船の煙も
まだ見えぬ
いくさが果てたか、死んでてか
今夜のお月様
なぜ赤い
血染の色してなぜ赤い
お鳩のたよりもまだつかぬ。

「おや〳〵、三郎はなか〳〵歌がうまいね。」
とお父さんは感心して仰いました。
「上手でせう。僕はいつも唱歌は甲だもの」
と三郎さんは自慢しました。
その時お宮の方から又ドンドコ〳〵〳〵と太鼓を打つ音が聞えて來ました。
「おや、太鼓を打つてゐる。屹度盆踊りが始まるのだよ。」
と三郎さんはそれを聞いて云ひました。
「見に行きたいのだなア」
とお父さんはそれを聞いて笑ひ乍ら仰いました。
「えゝ」
と三郎さんは一寸氣まりが惡さうに云ひました。

「ちやお父さんが連れて行つて上げやう。」
とお父さんは云ひ乍らステッキを持つて出て來られました。
三郎さんとお父さんとがお宮に行つた頃、まう町の青年達が集つて盆踊りを始めてをりました。三郎さんは暫くそれを見てをりましたが一寸も面白くないので、
「お父さん、詰らないから歸りませう。」
と云ひました。
「あゝ歸らう。詰らないだらう。」
とお父さんも云はれました。そして二人は來た道を引返して行きました。
その時はまうまんまるいお月樣が空高く上つて下界を照してをりました。
「お月樣の光りでも隨分明るいね。」

と云つて三郎さんは空を見上げ乍ら云ひました。そしてふと思ひ出したやうに、

「お父さん〳〵。あのお月様の黒い模様は何なの？　兎がお餅をついてゐるの。」

と訊きました。

「あゝ、あの黒い模様が兎の形に似てゐるから、月の中で兎が餅をついてゐるとか、又は月の世界に兎が住んでゐるとか昔の人は考へたのだよ。」

とお父さんは仰いました。

「どうしてそんなことを考へたのだらう。お話して下さいよ、お父さん。」

と三郎さんはせがみました。

「ぢや歩き乍らそのお話をしやう」

と云つてお父さんは話出されました。

（二）深切ごっこ

お月様はいつものやうに晴々として御氣嫌がいゝのだが、永いこと雨の日が續いて、ちつとも見晴らしがきかないので、流石お月様も氣がくしや〳〵して、

「全く意地の悪い雲だ。早くどこえでも飛んで行けばいゝに。」

と云はれたので、雲は喫驚して隠れて了つた。それでお月様はやつと氣が晴れて、

「あゝこれで氣がせい〳〵した。」

と云ひ乍ら、なつかしさうに下界を見降ろされてゐた。又下界でも久しぶりで美しいお月様の姿が拝めたものだから、人や動物や草や木までが、

「久しぶりでお月様の美しい姿が拝めた。何テすが〳〵しいお姿なんだらう。」

と嬉しさうにお月様を見上げた。

お月様はそれを見て大變滿足に思はれた。

「地球の人々やその他のすべての者が皆な自分の姿を見たがつてゐるのだ。あゝ海があんなに光つてゐる。私がなければ海はあんなに美しく光ることは出來ない。おや〳〵鼠があすこであんないたずらをしてゐる。しつ〳〵。」

とお月様はすつかり氣嫌がよくなつてあちこちと眺めてゐられると、ある丘の上で狐と猿と兎とが三匹集つて何かしきりに相談してゐるのが目に入つた。

「おや〳〵何をしてゐるのだらう。あいつらのことだから又何かよくない相談をしてゐるのかも知れない。」

とお月様はぢつとその樣子に注意してゐられると、どうも平常とは少し樣子が異つてゐる。三匹が三匹ともひどく改たまつて殊勝らしい顏つきをして、嘘をつくことが上手なので評判の狐は頸を傾けて考へ込んでをるし、道化者の猿はおかしい位に仔細らしい顏付をして控へてゐる。又平常は怠け者で通つてゐる兎が、今日は頻りと熱心に狐の方を向いたり、猿の方を向いたりして話をしてゐる。

「いよ〳〵變だな。これは何か大變なことでも起つたのではあるまいか。」

とお月様は耳を澄まして兎の云つてゐることを聞いてをられた。それを知らずに兎は一生懸命になつて、

「ねえ狐さんに猿さん。私は永い間考へてゐたのだよ。本當に私達のしてゐることは我儘勝手なことばかりだつたと。そして自分のことばかり考へて他人

に迷惑をかけるのはよくないと考へたのさ。ねえこれは實際のことだ。神樣は各自助け合つて行くやうにと仰つてゐられるのに、今まで私達のやつて來たことは一つとして神樣の御氣に入つてゐることはない。今日から心を入れ代へてもつと立派な行ひをしやうぢやないか。例へば弱い者をいたはつたり、困つてゐる者を助けたりすると云ふ風に。」

お月樣はそれを聞いてすつかり感心して了はれた。

「まア兎に似合はぬ感心なことを云つてゐる。狐や猿はどう云ふか知ら。」

と猶も耳を澄まして聞かれると、狐は兎の言葉を聞いて、

「兎さんの云ふことは道理だ。私達は今までよい事と云つたら何もしてゐない。人を欺したり、百姓の鷄を盗んだりしてばかり居たのだからね。本當によくないことだつた。一つ心を入れ代へて立派な行ひをしやう。」

と云つた。すると猿も敗けずに云ふことには、

「いたずらにかけては誰れにも敗けない私だけれど、成る程考へて見ればいろいろよくないことをして來た。兎さんの云ふ通りこれから心を入れかへて立派なものにならう。」

お月樣は之れを聞いてすつかり感心して了はれた。

「まア何て感心な心がけだらう。あの性質のよくない狐が人助けをしやうなんて。又あの道化者の猿が眞面目に心を入れ代へるなんて。その上兎が眞先きにそんなことを云ひ出したのも感心だ。こんな怠け者が困つてゐる者を助けるなんて本當に出來るかしら？」

と半信半疑でゐられると、恰度そこへ一人の乞食が杖をつき乍らとぼ〳〵とやつて來たのだ。もう三日も四日も御飯を食べないやうにげつそりと痩せて居

て、一足歩くのも退儀なやうだつた。

「あゝお腹がすいた。もうこの上は一足も歩けない。死にさうだ。」

と乞食は呟いてべつたりとそこに坐つて了つた。

「おや〳〵可愛想に乞食は今にも死にさうになつてゐる。あの三匹の獣物は今云つた通りにするだらうか。嘘ぢやなからうか見てゐやう。」

とお月様はぢつと様子を見てをられた。

どこかで變な物音がしたので、今まで話に夢中になつてゐた三匹の獣物は默つて顔を見合せて。

「何だらう。」

と大きな耳をもつた臆病な兎が第一に云つた。

「誰かやつて來たやうだ。」

と狐が云つた。

「おかしいな。誰かうなつてゐるやうだ。」

と猿が云つた。

「僕が見て來よう。」

と狐は立ち上つて少しばかり丘を下りて來ると、そこに一人の乞食が倒れてゐるではないか。

「おや〳〵死んでゐるのか知ら。」

と思つてよく窺き込んで見ると、少しばかり眼を開いてゐる。それがいかにも空腹を訴えてゐるやうだ。狐はすぐそれが分つたから大急ぎで引き返して來た。

「様子はどうだつたかね。」

と猿は聞いた。

「大變だよ。乞食が向ふで空腹のために倒れてゐる。」

と狐は告げた。

「それはほつてをけない。今も云つて居た通りだから、困つてゐる者は助けてやらなくてはならない。」

と兎は云つた。

「さうだ。助けてやらう。」

と狐はそれに同意して云つた。

「賛成」だ

とすぐ猿も同意した。

（三）食物を求めて

「おや〳〵矢張り本當に心を入れ代へたのだ。感心々々。」

とお月様は思はず手を拍つて感心なされた。狐と猿と兎は、

「それではめい〳〵食物を探して來て乞食に食べさせてやらうではないか。」

と相談した。

「ぢや大急ぎで行つて來やう。」

と三匹はめい〳〵に勝手な方面へ食物を探しに行つた。

狐はいつも自分のうろつく墓場にやつて來た。

「何か乞食に食べさせるやうなものはないかしら。」

とあたりを見廻すと、恰度お盆だつたから墓の前にはお團子やその他のいろ

いろな御馳走が澤山供へてある。

「おや〳〵澤山ある〳〵。おいしさうなものがあるね。乞食に持つて歸るよりも自分で食べやうかしら。」

と考へたけれどすぐ思ひ返して、

「それでは友達と約束した手前すまない。いつまでも狐は嘘つきだと云はれては狐の顔にかゝわるから。今日は辛抱して乞食に食べさせてやらう。」

と決心した。けれど、どうしてこれを乞食のところまで運んで行つていゝか分らない。一寸口に啣へて見ましたが、それではおいしさうな匂ひが鼻についてたまらない。すぐ咽喉へ辷り込みさうだ。

「これではいけない。何とか工風してうまく持つて行つてやらう。」

と又あたりをキョロ〳〵見廻すと、恰度幸ひに袋のやうなものが落ちてゐた。

「さうだ。この中へほり込んで引張つて行くに限る。」

とすぐ樣袋を持つて來てその中へ御馳走を詰め込んで、袋の口を啣へて引張つて來た。

又猿は早速森の中へ驅け込んで、登に登つた。すると目の前に大きな立派な栗の實がなつてゐる。

「おや〳〵こんな大きな栗の實があるのは知らなかつた。おいしさうだ。一つ食べて見よう。」

と一つ採つて口の中へほり込んで了つた。その時猿はふとさつきのことを思ひ出した。

「一體俺は何しに來たのだつたね。さうださうだ。乞食に木の實を食べさせてやりたいためだつた。それだのにもう忘れて了つた、自分一人で食べては友達

にすまない。皆な持つて行つてやらう。」

と口の中へほり込んだものも吐き出して、その他柿や棗や皆々果實と一緒にして乞食の處へ持つて來た。

又こちらは兎だ。

「俺は狐や猿よりももつとおいしい食物を探して來なければならぬ。」

と大變な元氣で丘から野原へ走つて出たが、相憎と何んにも見つからない。

「弱つたなア。こんなに何も食物がないとはどうしたことだらう。今度は森へ行つて見よう。」

とすぐ引返して森の中を驅け廻つて見た。けれど森の中でも何にも見つけることは出來なかつた。

「これは困つた。谷へ行つて見よう。何かあるかも知れない。」

と又谷の方へ走つて行つた。けれどこゝでも何も見つけることは出來なかつた。

「あゝ困つた。仕方ないから歸らう。狐や猿は何か持つて歸つてゐるかも知れない。」

とすご〳〵と歸つて來た。その時乞食は猿や狐の持つて來てくれた御馳走を食べて、やつと口が利けるやうになつてゐた。

「狐さんに猿さん。有難うございました。お蔭樣で命が助かりました。このまま死んでゐたら私は死んで了ふ處でした。有難うございました。」

と繰返し〳〵お禮を云つた。

そこへ兎は何も持たないでひよつこりと歸つて來た。狐と猿とはすぐ兎に向つて、

「兎さん。遲かつたね。何かおいしさうな食物があつたかい。」

と訊いた。

兎は面目ないやうな顏をして、

「今日はどう云ふ譯か何んにも見つからないのだよ。畑へ行つて見たが食べるやうなものは何もない。森の中を探して見たが何もなかつた。又谷へ行つて見たがこゝでも何も見つからなかつた。」

と云つた。

疑ひ深い狐は兎が何も持つて來なかつたので、屹度兎は何もせずに遊んでゐたに違ひないと思つた。

「野と森と谷と探して何もないことはない。僕たちばかりに働かして君は遊んでゐたのだらう。」

と狐は云つた。すると猿も傍から

「さうだ。さうに違ひない。僕たちはこんなにいろ〳〵な物を持つて來たのに何も見つからなかつたと云ふ筈はない。」

と云つた。

兎はさう云はれて情なく思つて、

「いや本當なんだよ。本氣で探し廻つたのだけれど何も見つからなかつたのだ。」

とやつきになつて辯解したが、狐と猿とはなか〳〵承知しない。

「嘘だ〳〵。そんな嘘を云つたつて駄目だ。」

と狐は云つた。

それには流石の兎も腹を立てゝ、

「それ程諸君が疑つてゐるなら、もう一度僕は探して來る。」

と云ふなりぱつと飛び出して了つた。狐と猿とはその後姿を見送つたが、兎はすぐ森の中へ隱れて了つた。

（四）兎の決心

情ないやら、腹が立つやらで、兎は夢我夢中で東から西に、又は南から北へと走り廻つて食物を求めたけれど、どうしたことか何一つとして見つけることが出來ない。あの赤い眼は血走つて一層赤くなつた。足は棒のやうになつて氣はせいても、もう走ることも出來なくなつて了つた。

兎は途方に暮れて木の根に座り込んで了つた。

「あゝどうしたらいゝだらう。餘り村近くに行けば獵夫に出遇ふかも知れぬし餘り山深く入つて行けば恐ろしい獸に見つかつて取つて食はれるかも知れぬ。そんな風に殺されるよりは一そのこと……。」

と兎は何かしら一人で考へて大きな溜息をついた。

「さうだ。それより外に方法はない。さうして狐や猿の疑ひを晴さう。」

と兎は何かしら決心して立ち上つた。

しばらくたつて兎は又前と同じやうに何一つ獲物を持たないですご〳〵と歸つて來た。

兎の姿を見ると猿と狐とは、

「隨分暇がかゝつたね。何か見つかつたか。」

と訊きました。

「あゝ見つかつたよ。素的においしさうな獲物だよ。」

と兎は元氣のない聲で云つた。

「どれ〳〵、早く見せ給へ。」

と猿と狐は近寄つて見たが兎は何も持つてはゐない。

「おや、何もないぢやないか。又嘘を云つてゐるのだな。」

と猿も狐も腹を立てゝ云つた。

「いや決して僕は嘘を云はないよ。今に見せてあげるからすまないが薪を拾つて來て火を焚いてくれないか。」

と兎は二人に向つて云つた。

「火を焚いてどうするのだい。」

と狐と猿とは不思議さうに訊いた。

「獲物を燒くのだよ。」

と兎は答へた。

「だつて獲物は何もないぢやあないか。」

と狐も猿も不思議さうに兎の顏を見て云つた。

「まア何でもいゝ。火を焚いてくれたら獲物がどんなものかすぐ見せて上げるよ。」

と兎は云つた。

猿も狐もどうも兎の樣子が變だと思つた。けれどまさか兎が自分達を欺すのではあるまいと思つたから、

「そんなことを云つて僕たちを欺しちやきかないよ。」

と云つて森の中へ枯枝を拾ひに行つた。間もなく猿と狐とは兩手で抱へ切れない程澤山薪を拾つて來た。兎はその間元氣なく待つてゐたが、それを見ると

すぐ、

「それだけあれば澤山。すぐ火をつけてくれ給へ。」

と云つた。猿はすぐそれに火をつけました。薪は一度にぱつと燃え上つた。

「さあ獲物を出した。」

猿が聲をかけた。

「よし」

と兎は身構へをし乍ら乞食の方を向いて、

「おいしい獲物と云ふのは僕の身體だ。僕は今日何んにも食物を見つけることが出來なかつたから、僕の身體を燒いて差上げますからどうかそれを食べて下さい。」

と云ふや否や火の中に飛び込んで燒け死んで了つたのだ。

（五）お月樣の情

それを見た狐も猿も乞食も皆な喫驚して呆氣にとられて了つた。と云ふのはそれは餘り意外な出來事だつたから。そして彼等は狼狽して只うろ〳〵としてゐるばかりだつた。

いや驚いたのは狐や猿や乞食ばかりではなかつた。この出來事を始めからすつかり見てゐたお月樣の方がもつと驚かれた。そして驚きの餘りにすんでのことに足を踏みはずして空から落ちさうになつた位だ。

「あゝ兎は感心な者だ。自分の身をすてゝまで人を救はうとした心掛けは、すべての人の手本だ。」

とお月樣は思はれたに違ひない。そしてこの不憫な兎を永久に月の世界に住

むことをお許しになつた。そしてこれから月に兎の姿が見えるやうになつたと云ふことだ。」

とお父さんは仰いました。

「隨分面白い話だね。そんなことが本當にあつたのかしら。」

と三郎さんはお父さんの手にすがつて歩き乍ら云ひました。

「いゝや、これは昔の人が月のあの黒い模様を説明しようと思つて作つたお話なんだ。」

とお父さんは云はれました。

「ぢやあの黒い模様は一體何なの？」

と三郎さんは質問しました。

「あれか。あれはね、昔はお月様の海だつた跡さ。昔はお月様も地球と同じやうに海があつて水がたまつてゐたのだ。しかし今ではお月様はすつかり冷えて了つて、海には水もなくなり、深い海のあとがあのやうに黒く見えるのだよ。」

とお父さんは説明して下さいました。

「それぢやお月様は死んでゐるの？」

と三郎さんは聞き返しました。

「さう〳〵つまり死んだと同様だよ。」

とお父さんは頷いて見せました。

「それぢや死んだお月様には人やいろ〳〵な動物や、植物などはないの？」

と三郎さんは又聞きました。

「さうだ。お月様の世界には水もなければ空氣もない。それでは動物も植物も

生きて行くことが出來ないのだ。」

とお父さんは仰いました。

「けれどお月樣は死んだものとしても、どうしてお日樣のやうに光つてゐるの？。」

と三郎さんは又聞きました。

「あれはね、お日樣は自分の光りで光つてゐるのだけれど、お月樣は死んでゐるから自分の光りと云ふものは持つてゐない。あのやうに光つてゐるのは皆なお日樣から受けた光りを反射してゐるので、決してあれはお月樣自身の光りではないのだ。」

とお父さんは説明されました。

お日樣とお月樣の喧嘩

（一）十六夜

「昨日あんなにまん丸かつたお月樣が、今日は早や少し歪んで來た。」

と三郎さんは翌日も縁側に出てお月樣を見乍ら考へました。そして昨夕聞いたお話を思ひ出して、今日も又面白いお話が聞きたくなりました。

「お父さん。今日も面白いお話を聞かせて下さい。昨夕のやうな。」

と三郎さんはお父さんの居間へ走つて行つてお父さんの膝にすがり乍ら云ひました。

「あゝよし〳〵。今日もお月樣のお話をしてあげよう。」

とお父さんは三郎さんの頭を撫で乍ら縁側に出て並んで腰をかけました。そしてお父さんは話し出されました。

（二）梟と烏の賭

ある森に梟と烏が住んでゐた。二匹は大變仲がよくて兄弟のやうだつたけれど、どうしても二匹は一緒に餌を探しに出かけたり、遠くの方へ見物に出かけたりすることは出來なかつた。何故かと云ふと梟は晝間寢てゐて夜しか外へ出かけないし、烏の方はそれと反對に晝間外へ出て、夜は暗くなるとすぐ眠つて了ふからだ。

ある日雨が降つたので烏も一日森の中に引込んで居た。そして梟と久しぶりでいろ〳〵な世間話をしてゐたが、烏はふと思ひ出したやうに云ひ出した。

「梟さん。一體この世の中で誰が一番傑いだらうね。」

「梟は暫く考へてゐたが、

「それはお月樣だと思ふ。」

と云つた。

「いや僕はお日樣だと思ふね。」

と烏は云つた。

「いやお月樣だよ。お月樣は美しくつて情深くつてそれはいゝ方だ。」

と梟は云つた。けれど烏も敗けてゐない。

「いやお日樣だよ。お日樣は勇しくつて火の車を走らせてこの世界を照して下さるのだ。そして下界で惡いことをしてゐる奴を御覽になるとすぐ罰して下さるのだよ。いゝかひ、草や木が青々と生きて行けるのもお日樣のお蔭げだ。僕

たちもお日様のお蔭げで生きて行けるやうなものだ。」

と云つた。

「それはさうかも知れないが僕はお日様が嫌だ。第一お日様が照つてゐられる時外へ出られもしない。世界で一番傑い方は矢張りお月様だ。」

と梟は頑固に云ひ張つた。

「いやそれは君の思ひ違ひだ。お月様はあつたところで何の役にも立ちはしない。俺はお月様がなくたつて生きて行けるからな。矢張りお日様が一等傑いのだ。」

と烏は烏で云ひ張つた。

「何にそんなことがあるものか。」

と梟は躍氣になつて怒鳴つた。

「君こそ無茶を云ふのだ。」

と烏も怒鳴つた。

二匹の聲が餘り大きかつたので、同じ森に住む雀と蝙蝠とが驚いて飛び出して來た。

「大きな聲を出して何を喧嘩してゐるのかね。詰らない喧嘩は止した方がいゝよ。」

と蝙蝠は仲裁に這入つた。

梟は蝙蝠を見ると、

「まア聞いてくれ。實は世界で誰が一番傑いかと云ふ話が出たのだ。僕はお月様が一番傑いと云ふし、烏さんはお日様だと云ふのだ。一體どつちが本當だらう。君はどう思ふ？」

と云つた。

「さア」

と蝙蝠は考へて見た。けれど蝙蝠も夕方から飛び廻るのでろくにお月様もお日様も見たことがありません。それでこれは梟の云ふやうにお月様の方が傑いだらうと思ひました。

「どちらかね」

と梟は考へてゐる蝙蝠に催促した。

「さうだね、僕は梟さんの云ふやうに矢張りお月様の方が傑いと思ふね。」

と蝙蝠は云つた。

それを聞くと烏は承知しない。

「そんなことはない。もし〳〵雀君々々。君はどう思ふ。」

と雀を振り返つて云ひました。

「僕は。」

と雀は考へ乍ら云つた。

「お月様よりお日様の方が傑いと思ふね。」

と烏の方に賛成した。雀は烏に賛成しないと、又ひどい目に逢はされると恐ろしいと思つて賛成したのだ。

「君達二人はお月様の方が傑いと云ふし、僕達はお日様の方が傑いと云ふし、一體どつちが本當だらう。」

と烏は云つた。

「いや僕達の方が本當なんだ。」

と梟は飽くまで云ひ張つた。

それを聞くと烏も腹を立てゝ、
「嘘を言へ。僕の云ふことが本當なんだ。」
と怒鳴つた。
「何だ生意氣な。」
と梟は烏に飛びかゝつて來たので、蝙蝠は喫驚して引き止めた。
「まゝ待ちなさい。喧嘩したつて仕方がない。それよりも百舌鳥さんに聞いて見たらどうでせう。百舌鳥は物識りだから。」
と蝙蝠は云つた。
「それがいゝ〳〵。」
と雀が賛成した。
「ぢやさうしよう。」

と梟も烏も喧嘩を止した。
「ぢや僕が百舌鳥さんを呼んで來る。」
と蝙蝠はどこかへ飛んで行つたが、暫くすると氣取つた百舌鳥を連れて來た。
「何だい。わざ〳〵僕を引張り出して。」
と百舌鳥はえらさうに云つた。
「實はね、こゝにゐる梟さんと烏さんとが、世界で誰が一番傑いかと云ふことについて、梟さんはお月樣が傑いと云ふし、烏さんはお日樣が傑いと云ふのですが、一體どちらが正しいのでせう。一つ百舌鳥さんに聞いて見やうと思つてお招きしたのです。」
と雀が云つた。
「何だい。そんなことか。」

と百舌鳥は口先きで何でもない、と云ふ風に云つたが實は百舌鳥にも分らないのだつた。

「ねえ君、お月様だらう。」

と梟は百舌鳥に云つた。

「いやお日様だねえ君。」

と烏も云つた。

「まア待つた。これは實に大變な問題だから僕はすぐどつちに賛成することも出來ない。」

と百舌鳥は氣取つた先生のやうに云つた。

「どうしてなんだねえ。」

と傍から蝙蝠が訊いた。

「先づ第一番にどちらが大きいかと云ふことを決めねばならない。そして大きい方が傑いに違ひない。」

と百舌鳥は我れ乍らうまいことを云つたものだ、と感心し乍らかう云つた。

「成る程それはもつともなことだ。」

と一同は百舌鳥の智慧に感心した。けれども誰もどつちが大きいか知らないのだつた。

(三) どつちが大きいか

皆は默つてどちらが大きいか考へてゐたが、暫くして雀が云ひ出した。

「一體どちらが大きいでせうね、百舌鳥さん。」

百舌鳥もそんなことは今まで考へたことがなかつたので當惑して云つた。

「さアそれは誰も知つてゐる者はないだらう。直接お月様かお日様に聞いて見るより外はないよ。」

「成る程それが一番早い。」

と梟も烏も賛成した。そして梟はお月様に、烏はお日様に聞きに行くことにした。

「お月様が大きいに決つてゐる。屹度僕の方が勝ちだよ。」

と梟は云つた。

「馬鹿云へ。屹度僕の方が勝ちだよ。萬一僕が敗けたら一生君の家來になるよ。」

と烏は云つた。

「よし、僕が敗けたら君の家來にならう。」

と梟も云つた。

そして梟はお月様の方へ、烏はお日様の方へ飛んで行つたのだ。

梟は烏よりも早くお月様についた。お月様は不思議に思つて、

「わざ〳〵こゝまで何の用があつて來たの？」

とお訊きになつた。

梟はかしこまつて、

「私はこの世界でお月様が一番傑い方だと思つてゐるのに、烏はお日様が一番傑いと云ひます。そこえ百舌鳥が出て來て、どつちか大きい方が傑いのだと云ひましたから、わざ〳〵聞きに參りました。」

と云つた。

「まア私と兄様のお日様とどちらが大きいか訊きに來たのだつて？」

とお月様は呆氣にとられて云はれた。

「さうです。ねえ、お日様なんて小ぽけちやありませんか。お月様の方がずつとずつと大きいのです。さうでせう。」

と梟は云つた。

お月様も自分のことをよく云はれるのですから惡い氣もしないので、

「私達は一緒に生れたのだからどつちが大きいか知らないけれど、さう云はれると私の方が大きいかも知れない。」

とお月様もそんな氣になつて云はれた。

「さうですとも〳〵。お月様の方がずつと大きいのです。そして傑いのです。さあこれでしめたものだ。今日から烏は僕の家來だ。」

と喜んで飛んで歸つて來た。

こちらは烏です。一生懸命に飛んでお日様に着きますと、

「お日様お日様。貴方はお月様とどちらが大きいでせう。」

と訊いた。

「勿論僕の方が大きい。月の兄だもの。」

とお日様は言下に答へられた。

「しめた。これで安心した。梟は今日から僕の家來だ。」

と喜び勇んで歸つて來た。

森では蝙蝠と雀と百舌鳥と、それから先きに歸つた梟とが待つてゐた。

梟は烏を見ると、

「どうだつた。お月様は自分の方が大きいと云はれたよ。」

と勝ち誇つて云つた。

それを聞いた烏は大いに怒つて、

「嘘を云へ、お日様は自分の方が大きいと云はれた。お月様がそんなことを云はれる筈はない。多分君が僕の家來になるのが嫌さに嘘を云つたのだらう。」

と梟に喰つてかゝつた。

「何だと。默つてをればつけ上つて何を云ふのだ。お前の方が嘘を云つてゐるのだらう。嘘だと思ふならお月様に訊いて見ろ。」

と梟はすぐ喧嘩腰になつて云つた。

「ぢやお月様へ一緒に行つて訊いて見よう。」

と烏は敗けて居ずにさう云つた。

「よし行かう。」

と梟はすぐ樣烏と一緒に飛び出した。

やがて二匹はお月様に着いた。今度は二匹でやつて來たので、お月様は何事かと思つて、

「今度は何の用かね。」

とお聞きになつた。

梟はお月様の前にかしこまつて、

「お日様はお日様で自分の方が大きいと云はれたさうです。でこの烏が承知しません。お月様からよく合點の行くやうに云つてやつて下さい。」

とお願ひした。

「合點の行くやうにつて、どうすればいゝの？」

とお月様はお聞きなつた。

「私はお日様にお目にかゝつて直接お伺ひしたのですから間違つてをりませ

ん。でお月様がお日様に向つてはつきり話を決めていたゞきたいと思ひます。」

と烏は云つた。

「さう。ぢやお日様に聞いて見よう。」

とお月様は早速お日様に向つて、

「兄様。私と貴方とどつちが大きいでせう？私の方が大きいでせう？」

と云はれました。

それを聞いたお日様は、

「そんなことはない。わしの方がずつと大きいよ。」

と答へられた。

「だつて私の方が大きいと云ふものがあるのよ。」

とお月様は承知せず云はれた。

「馬鹿を云へ、わしの方が兄だもの。お前より大きいに決つてゐる。」

とお日様は云はれると、

「だつてそんなことはない筈だわ。」

とお月様は不平さうに云つた。

「何だつて。妹のくせに兄より大きいなんて生意氣なことを云ふ奴だ。そんなことを云ふ奴は妹と思はない。顔を見るのも嫌だ。もうお前と一生顔を合はさない。」

とお日様は頭からぷん〳〵湯氣を立てゝ怒つて云はれた。

「そんならいゝわ、私だつてもう二度と顔を合さないことよ。」

とお月様もすねて了つて、それからお日様の出てゐる間は決してお月様は顔を見せなくなつたのだ。そしてお日様が西の山に隱れると、入れ代つてお月様

が出るやうになつたのだと云ふ話がある。

とお父さんの話は終りました。

（三）お日様とお月様とが顔を合さない譯

「隨分面白いお話だね。その喧嘩からお月様とお日様とは決して同じ空に現れないの？」

と三郎さんは訊きました。

「いやさうではない。お月様は地球の周りを一廻りするのに二十七日と八時間足らずかゝるのだよ。」

でその半分の間は地球の後にゐることになり、殘りの半分の間は地球の前方にゐることになる。そこでお月様が地球より前にゐる時は、お日様は地球にお尻を向けてゐるのでお月様は自分から光りを放つてはゐないのですから、この時お日様に照されてゐる部分が向ふを向いてゐるからその反射する光りが地球に來ないために全然見えないのだ。けれど段々と地球の後方に廻つて來るに隨つて、今度はお月様の顔、つまりお日様が照つてそれを反射してゐるお月様の表面を見ることが出來るやうになる。つまりお月様の反射した光りが地球の裏即ち夜の部分を照すのだ。でお月様に約半月の間、夜間だけしか見えないことになるのだよ。」

とお父さんは説明して下さいました。

「それでやつと分つた。昔の人はそんなことを知らなかつたの？」

と三郎さんは急に晴々とした氣分になつて云ひました。

「さうだ。昔の人はそんな理屈を知らなかつたものだから、本當にお日様とお

月様とが別々に現はれると云ふことが不思議だつたのに違ひない。だから今でも野蕃人の間には、太古はお日様が二つあつたために草も木も人も焼けて死ぬ程暑かつた。そこで幾人かの勇士が現れて太陽征伐に出かけ、一つの太陽を射落したから、そもそも恰度いゝ加減な氣候になつた。その射落された太陽がお月様だなど云ひ傳えられてゐる。」

とお父さんは云はれました。

「面白いなア、太陽を射落すなんて全く素的だ！」

と三郎さんは思はず手を拍つて叫びました。そして急に思ひ出したやうに、

「しかしお父さん。お日様とお月様とは兄妹なの？」

と訊きました。

「それは嘘だ。それはお祖父さんと孫とに例へた方がよい。つまり地球はお日様の子で、お月様は地球の子だから。その證據には月は地球の周圍を廻つてをり、地球は太陽の周圍を廻つてゐるのだ。」

とお父さんは仰いました。

「あゝさうだ〳〵。それで分つた。けれど本當にどつちが大きいの？」

と三郎さんは又訊きました。

「それはお祖父さんにあたる太陽の方がずつと〳〵大きいさ。その大きさは月の四百倍もあるのだもの。」

とお父さんは笑ひ乍ら云はれました。

「お日様はお月様の四百倍も大きいの？そんなに大きいの。」

と三郎さんは喫驚して目を見張りました。

「しかし四百倍も大きいお日様がどうしてそんなに小さいお月様と同じ位にし

か見えないの？」

と三郎さんは不思議に思つて訊きました。

「それはね、例へば地球からお月様までの距離が一尺だとすると、地球からお日様までの距離は四百尺もある譯なのだ。つまりお月様までの遠さよりも四百倍も遠いのであんなに少さく見えるのだよ。」

とお父さんは説明して下さいました。

「なる程、大きさが四百倍あつても、その遠さが四百倍になつてをれば同じ大きさに見える譯ですね。」

と三郎さんは感心して云ひました。

お月様と着物

（一）寒いお月様

お盆が過ぎたと思つたら、いつの間にか秋が來、冬が來て、やがてお正月が近づきました。三郎さんの嬉しい〳〵お正月です。

「お正月、早くくればいゝなア」

と三郎さんはもう新しい著物を買つていたゞいたり、下駄を買つていたゞいたり、凧を伯母さんからいたゞいたりして待つてゐるのです。

「三郎や。」

とお母さんがお呼びになりました。

「何アに。」

と三郎さんはお母さんの方へ走つて行きました。

「お母さんはこれからいろ〳〵お正月の飾物を買ひに行きますから一緒に行つて頂戴」

とお母さんは仰いました。

「ハイ。」

と三郎さんはすぐ返事をしました。

「寒いから羽織を著てマントを著るのですよ。」

とお母さんは買物の支度をし乍ら仰いました。

三郎さんはすぐ自分の部屋へ走つて行つて帽子を冠り、マントを著て、お母さんと一緒に外に出ました。

「おゝ寒い。」

と外の風にあたるとお母さんは肩をすぼめて仰いました。

「そんなに寒いの？僕なんかさう寒くないよ。」

と三郎さんは元氣に云ひました。

「さうですとも、子供はこれ位の寒さに寒い〳〵と云ふやうでは駄目です。子供は風の子なんですもの。」

とお母さんは笑ひ乍ら仰いました。

「嘘、嘘、風の子なんてありやしない。」

と三郎さんは元氣に云ひ乍ら淋しい道を歩いて行きました。

暫くすると賑かな町へ出ました。お母さんは店に這入つていろ〳〵なお買物をなさいました。店には矢張りお母さんと同じやうにお正月の買物をする客で一杯になつてをりました。

三郎さんはその間店の前に立つて待つてをりました。退屈だつたから口笛を吹いて見ました。すると何だか非常に寒いやうな氣がして來ました。

「寒いなア」

と三郎さんは思はず首をすぼめました。町はどこもこゝもお正月の支度で忙しいやうです。

やがてお母さんは買物をすませて出て來られました。

「お待ち遠さま。」

と云つて小さい方の風呂敷包みを三郎さんに渡して、

「これを持つて頂戴。」

と仰いました。

三郎さんはマントの中で懷手をしてゐたので、大變面倒臭ひと思ひましたがお母さんも大きな風呂敷包みを持つてゐられるので、氣の毒でしたからいや〳〵乍らそれを持つことにしました。

二人は寄り添つて寒い道を歸つて行きました。見ると西の空に、五日頃の痩せたお月樣が寒さうにかゝつてをります。

「お月樣も寒さうだなア」

と三郎さんは思ひました。よく冴えたお空のお月樣、さうだお月樣の童謠を作つて見やう、と三郎さんは急に考へました。三郎さんは學校でも童謠が上手で有名なんです。

（二）お月樣の歌

三郎さんは暫く考へてをりましたが、急に面白い歌を考へ出して叫びました。

「お母さん、僕面白い歌を作つたよ。」

「さうどんな歌？」

とお母さんはお聽きになりました。

「お月様の童謠だよ」

と三郎さんはにこ〳〵して云ひました。

「唄つて御覽」

とお母さんは仰いました。

「そらかう云ふのよ。」

と三郎さんは唄ひ出しました。

お月さん

み空の
ひとり旅

お腹がすひて
寒さうだ

風に
吹かれて
寒さうだ

「おゝ上手々々」

とお母さんは感心して仰いました。

「うまい？」

と三郎さんはお母さんを見上げて云ひました。

「本當に三郎さんは童謡がうまいよ。」

とお母さんは三郎さんの頭を撫で乍ら云はれました。

「それはさうとお月様はどうしてあんなに痩せたり太つたりするの。」

と三郎さんは訊きました。

「本當にお月様は痩せたり太つたり、不思議な方です。三郎さんの童謡ではないが、こんなお話があります。」

とお母さんは話し出されました。

（三）お月様の不平

そろ〳〵寒くなるとお月様も人並みに着物が欲しくなりました。皆な誰も彼も冬の着物を着てゐるのに、お月様だけ相變らず薄着だものですから寒くつて仕方ありません。そこである日神様に向つて、

「神様々々〳〵、お願ひが御座ひます。是非聞いていたゞきたいのですが。」

と云ひました。神様はお月様の改たまつた言葉を不思議に思つて、

「願ひとは何ぢや。わしに出來ることなら何でもしてあげる。」

と仰いました。

「有難うございます。外でもございませんが、そろ〳〵冬の時候になりましたから、私にも着物をおめぐみ下さい。」

とお月様は云ひました。それを聞かれた神様は困つたやうな顔をして、

「折角の願ひぢやが、お前に合ふやうな着物がないからやることが出來ない。」

と仰せになりました。

お月様はそれを聞いてぷり〳〵腹を立てました。そして、

「なぜ私だけに合ふ樣な着物がないのですか。決してそんな譯があらう筈がありません。」

と云ひました。

「それを聞かれた神樣は氣の毒さうに仰いました。

「だつて考へて御覽、お前は折角圓くなつたかと思ふと三日月になつたり、三日月だつたかと思ふといつの間にか滿月になつたりする。全くお前は毎日〳〵姿を變へてゐるぢやないか。そんなにいつも〳〵變つて行く身體に合ふ着物があらう筈がない。」

お月樣はそれを聞いて成程さうだ、と思ひました。で仕方なく着物のことはそれ切り諦めて了ひました。で今でもあんなに寒さうに光つてゐるのです。

（四）太つたり痩せたりする譯

「面白い話だねえ。」

と三郎さんは感心し乍らお母さんに訊きました。

「一體お月樣はどうしてあんなに細くなつたり、又丸くなつたりするの？」

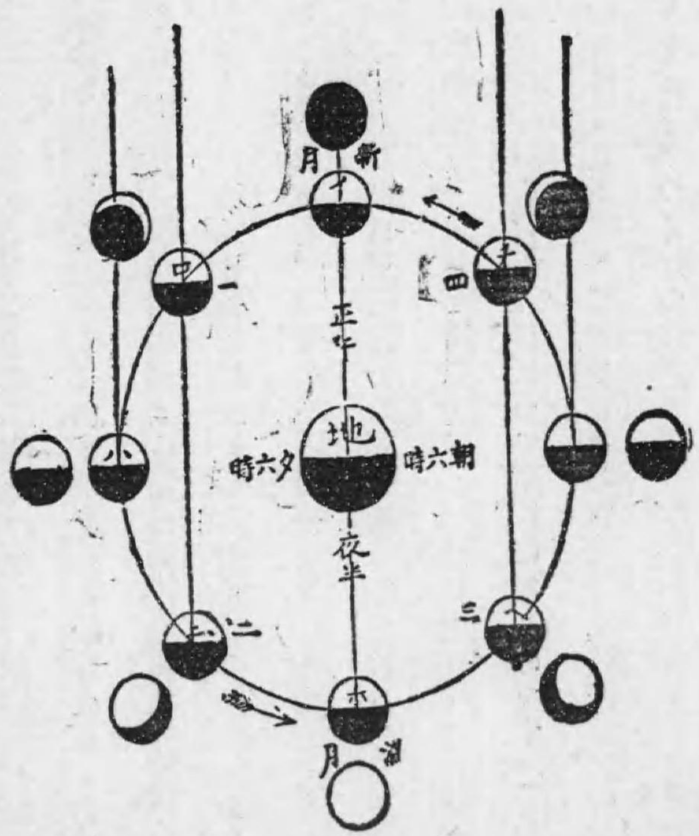
「誰でも一等不思議に思ふのはそのことです。けれどお月樣はこの話のやうに絶えず痩せたり太つたりしてゐるのではないのです。お月樣の形はいつも同じ丸さです。けれど地球から見て只そんな風に見えるだけです。」

とお母さんは仰いました。

「どうしてそんな風に見えるの？」

と三郎さんは尙不思議なやうに云ひました。

「それは何でもないのよ。お月樣が地球の周圍を廻轉してゐることは學校で敎つたでせう。お月樣が地球の周圍を一廻轉するのに要する時間は二十七日と七時四十三分十二秒です。けれど地球も太陽を中心にして動いてをりますから、月は地球の周圍を廻轉し乍ら地球の動く方に引ずられて行くのです。ですからもとの出發點の地位に歸つて來るのには約二十九日半かゝることになります。で假りに今日滿月とすれば、今度の新月まで約十五日かゝります。つまり地球のこちら側から、向ふ側に行くのに十五日ばかりかゝるのです。が七日頃にはその中程まで來ます。つまり地球の軌道の上あたりに來るのです。この時地球



と月とは並んで太陽の光りを受けることになります。これを地球から見ると、月の横を見ることになつて上半分が光つて見え下半分は黑くて見えないことになるのです。これが半月です。（この圖を御覽になればよく分ります）それから三日月はこの半月がも

う三日ばかり新月に近づくと、つまり太陽の方に近づいて行くと、月は矢張り上半分照されてゐるのですが、地球からこれを見ると斜に見ることになるので光つてゐる部分があのやうにはすかひにしか見えないのです。これが三日月です。それから月は段々と地球と太陽との間に這入つて來ます。そして平面的に見て太陽、月、地球と並んだ時が新月です。この時はお月様は地球に尻を向けてゐることになるし、地球の夜の部分からは見えませんからお月様は全く見えないのです。それは三日月から三日後です。けれど又三日たつと三日月が現れます。前の時の三日月が下弦で、この時が上弦です。それから又三日後に半月になり、新月から約十五日たつて滿月になるのです。」

とお母さんは説明して下さいました。

「あゝそれでやつと分つた。」

と三郎さんはも一度お月様を見上げました。そしてお月様の太つたり痩せたりする理由が分つたので大變愉快になつて口笛を吹いて勇んで歸つて行きました。

鬼神の惡戯

（一）今日は日蝕

「只今」

と三郎さんは元氣よく學校から歸つて來ました。

「お歸りなさい」

とお母さんはお針仕事の手を一寸休めて三郎さんを振り返つて仰いました。

「お母さん。今日は日蝕ですつて。」

と三郎さんは學校の先生から聞いて來たのでさう云ひました。

「あゝさうでしたね。お母さんはすつかり忘れてゐました。」

とお母さんは始めて氣がついたやうに仰いました。

「お母さん。日蝕を見るのにはね、金盥に水を入れて靜かにしてをいてお日樣を映して見るとよく見えるのですつて。」

と三郎さんは先生から敎はつた通り云ひました。

「えゝさうです。もうそろ〳〵日蝕の始まる時分ですから金盥に水を汲んで來て緣に出してをいて御覽なさい。」

とお母さんは時計を見乍ら仰いました。

「えゝ。」

と三郎さんは鞄を机の上に置いてから袴を脱いで、大急ぎで水を汲んで來ました。

「本當にかうして見れば一寸もまぶしくなくてよくお日樣が見えますよ。」

と三郎さんはぢつと水の中を覗き込み乍ら云ひました。

「もうそろ〳〵日蝕の起る時分よ。」

とお母さんは又時計の方を見やつて仰いました。

「未だ何ともないけれど、どうしたのだらう。」

と三郎さんは一生懸命に金盥の中を覗いてをります。やがて三郎さんは大聲で叫びました。

「やあ、お日樣が缺けだした。早くお母さん來て御覽なさい。」

「さう。」

とお母さんも立ち上つて縁側に出て來られました。

「まア段々と缺けて來るはね。」

とお母さんも金盥の中に見入り乍ら仰いました。

「さつきはほんの一寸だつたのに、もうこんなに缺けちやつた。」

と三郎さんは盥の中に物を云ふやうに云ひました。

お母さんと三郎さんとは並んで金盥の中を見入つてゐましたが、やがて十分ばかり立つと日蝕は終つて又もとのまん丸いお日樣に返りました。

「もう日蝕はすんだの」

と三郎さんは飽氣なささうに云ひました。

「えゝもうすみました。」

とお母さんは座敷に歸つて座り乍ら仰いました。

「日蝕つてほんの一寸しか缺けないのねえ。」

と三郎さんは云ひました。

「えゝ、日本あたりでは一寸しか缺けて見えませんけれど、世界のある所ではも

つともつと大きく缺て見えたり、又全部お日様が見えなくなつたりするのよ。」

とお母さんは仰いました。

「お日様が全部かくれて了ふの？」

と三郎さんは喫驚して云ひました。

「えゝさうよ。皆日蝕と云つて世界のある所ではすつかり見えなくなつて了ふのです。日本あたりではほんの一部分しか缺けて見えませんから部分蝕と云ふのです。」

とお母さんは仰いました。

全部お日様が見えなくなつたらどんなでせう？」

と三郎さんは云ひました。

「その間その所は眞闇になります。そして一度にお星様がキラ〳〵と輝いて見えるのです」

とお母さんは仰いました。

「晝間でも眞闇になるのですか。」

と三郎さんは不思議さうに云ひました。そしてふと考へ出したやうに、

「お母さん。日蝕つてどうして起るのです。」

と三郎さんは訊きました。

「本當に日蝕つて不思議でせう。今までまん丸かつたお日様が急に缺け始めたり、或は全部見えなくなつたりして了ふのですもの。昔の人は日蝕の始まるのを見て、もうこの世の終りが來たのだと思つて泣き悲しんだと云ふことです。」

とお母さんは仰いました。

「どうして？」

と三郎さんは聞き返しました。

「どうしてつて、お日様がなければ私たちは生きて行けないではありませんか、お日様があればこそ草や木が生長もし、動物も生きて行けるのです。ですからお日様の缺けてなくなつて行くのを見てこの世の終りが來たと思つたのも無理はありません。しかし暫くすると又もとの通りお日様は照り續けることが分つたものですから昔の人も馴れるに從つてやつと安心して來たのです。そしてお日様が缺けたりするのは天に大蛇が棲んでゐてお日様を呑まうとするのだ、など云ひ傳えられたのです。けれどお日様は火の塊だから却つてこれを呑まうとした蛇が燒き殺されてお日様は又もとの姿に歸られたのだ。と思はれてゐました。」

とお母さんは仰いました。

「蛇がお日様を呑むなんて滑稽だね。」

と三郎さんは笑ひました。

「又インドには日蝕や月蝕についてこんな話があります。」

とお母さんは次のやうなお話をして下さいました。

（二）鬼神の憑憤

むかし〳〵大勢の神様が寄り集まられて、非常においしいお酒を作らうと云ふ御相談がありました。それには誰一人異議を申立てられる神様もありませんでしたから、早速神様たちは乳の海をまぜかへし乍ら、おいしいおいしいお酒をお作りになりました。その匂ひは又何とも云へぬいゝ匂ひで、それが天上と云はず天下と云はず、世界の至る處に臭つて來たものですから、世界中の人々

や動物までがその匂ひをかいで鼻を動かし、お腹をぐう〳〵鳴らさせました。

「何と云ふいゝ匂ひだらう。こんなにいゝ匂ひのするお酒は又どんなにおいしいことだらう。」

とお酒のすきなものも、又嫌らひなものも等しく鼻をうごめかし乍ら云ひました。

「とてもたまらない。おゝ一度でもいゝからこんなおいしさうなお酒を呑んで見たい。」

と云ふ野心を起す者も澤山ありました。けれどこれは神々の召上る靈酒ですから誰も手を出すことが出來ません。

ところがこゝに一人の鬼神がありました。この鬼神もその匂ひに誘惑されて

「一度でもいゝからこんないゝ匂ひのお酒を飲んで見たい。」

と云ふ野心を起した一人です。元來鬼神は心のよくない神ですから、

「これは神樣の召上る靈酒だから手を出してはいけない。」

とおとなしく諦めるやうな男ではありません。

「神も糞もあつたものか。酒なら飲んでも構ふものか。酒はおいしい水だ。」

とばかりに、神々の留守を幸ひに大口を開いてがぶ〳〵と飲み始めました。そして一瓶のお酒を瞬く間に飲み干して了ひました。

「あゝおいしい〳〵。こんなおいしいお酒は生れてから初めてだ。」

と口のあたりを撫ぜ廻しました。そしてもう止せばいゝのに、

「ついでにもう一瓶失敬してやれ。とてもやり切れない。」

と又候他の一瓶を飲み干して了ひました。そしてもう止さうと思ひましたが飲めば飲む程おいしいお酒なので、大酒飲みの鬼神は、

「ついでにもう一瓶。」

と又他の瓶のを飲んで了ひました。そして了ひには、

「えゝ飲みついでだ。皆な飲んで了へ。」

と皆な飲んで了ひました。そして皆な飲んで了ふと、

「あゝおいしかつた。」

と胸のあたりを撫で下ろして知らぬ顔をして自分のところへ歸つて了ひました。

そのあとへ大勢の神樣たちが集つて、

「さてもうお酒が程よく出來た頃でせう。皆さん、どうぞお上り下さい。」

と云つて一人の神樣が瓶の蓋を取つて見られるとどうでせう。おいしい〳〵お酒が一杯入つてゐた筈だのにからつぽです。

「おや？」

と云ひ乍ら他の瓶の蓋を取つて見ますとこれも空つぽです。流石の神樣たちも大騒ぎを始めました。そして皆なの瓶を檢べて見ましたがお酒は一滴も殘つてゐません。

神樣はぷん〳〵怒られて、

「一體このお酒を盜んで飲んで了つたのは誰だらう。引捕へてひどい目に逢はせてやらねばならぬ。」

と評議を始められました。

ところがお日樣とお月樣とが、誰も見てゐないと思つて鬼神が安心して酒を飲んで了つたのを始めから終ひまでちやんと見てゐられたものですから、このことを早速神々にお知らせになりました。

「靈酒を飲んだのは鬼神です。鬼神は神も糞もあるものかと云ひ乍ら皆な飲んで了つたのです。」

それを聞いた神様達は大變お怒りになつて、

「憎い奴は鬼神だ、早速引捕へ、こらしめてやらう。」

と使ひをやつて鬼神がお酒に醉つて寝てゐる處を捕へて來させました。

「靈酒を勝手に飲んで了つたとは實に許しがたい奴だ。さあ白狀しろ！」

と神様は鬼様を睨めつけてお云ひになりました。

「どうして私が貴い靈酒を飲みませう。それは嘘です。」

と鬼神は白つぱくれて云ひました。

「默れ！貴様が靈酒を飲んでゐるのを始めから終ひまで日と月とが見てゐたのだ。神も糞もあるものかと惡口し乍ら飲んだと云ふがどうぢや。」

と神様はきびしくお云ひになりました。

鬼神はさう云はれてもう隱しても駄目だと思つて、自分の惡口を告げた日と月とを睨めて、

「憎い奴は日と月だ。今に仕返しをしてやるから覺えてゐろ！」

と云ひました。

「自分の惡いことを棚にあげてをいて他人を憎む奴があるか。とにかく貴様のやうな奴はかうしてくれる。」

といきなり神様の一人が劍を拔いて鬼神の首をすつぽりと切り落されました。

ところが鬼神は靈酒を飲んでゐたものですから不死の力を得て、首と胴とは斷たれ乍らも、その首は空中高く飛び去り太陽系中に入つて了ひました。

けれどその後も鬼神はその時のことを思ふと殘念で腹が立つて仕方ありません。

自分が首と胴とを斷たれたのは日と月とのためだ。その腹癒やせに日と月とを食つてやらう。」

と鬼神は時々日や月を食ひ出すのです。即ち日を食ふ時は日蝕になり、月を食ふ時は月蝕になると、印度人は考へてゐたのです。

とお母さんは抑いました。

（三）日蝕と月蝕との起る譯

「面白いことを考へたものですね。」

と三郎さんはすつかり話に引入れられ乍ら云ひました。

「ですから日蝕や月蝕が起る時、印度人は氣狂のやうになつて、

「離せ、離せよ。」

「緩めよ、緩め。」

と天に向つて絶叫するのです。そして暫くかう叫んでゐると又もとの通りになるので、自分たちの叫び聲によつて鬼神が日や月を離すやうになるのだと考へてゐるのです。」

とお母さんは仰いました。

「印度人つて馬鹿ですね。」

と三郎さんは云ひました。

「いゝえ、昔の人や今でも野蠻人の中にはそれと同じやうなことを考へてゐる所が多いのです。けれど學問が盛な文明國では、お日樣やお月樣の正體がはつ

きり分つて居ますから、そんなお伽噺見たいなことは人々が信じなくなつたのです。」

とお母さんは云はれました。

「ぢや日蝕や月蝕はどうして起るの？」

と三郎さんは訊きました。

「三郎さんは地球が太陽の周圍を廻つてをり、月が地球の周圍を廻つてゐることを知つてゐるでせう。つまり地球が太陽の周圍を一廻りするのに一年かゝり月が地球の周圍を一廻りするのに一ケ月かゝるのです。日蝕と云ふのは月が太陽と地球との間に來て、太陽から地球に届く光を遮る時に起る現象で、月蝕は月が地球の裏側に來て、地球の影の中にかくれて了つた時のことです。」

とお母さんは仰いました。

「それでは一ケ月の中に日蝕と月蝕とが一回づゝある譯ですね。」

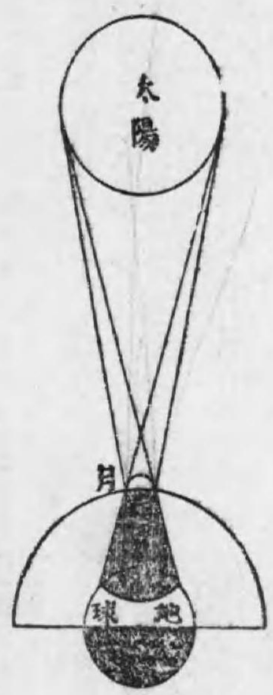
と三郎さんは云ひました。

「いゝえ、月と地球と太陽との軌道面が一致してをれば、もつと解り易く云ひますと、月と地球と太陽とがいつも同一の平面の上を動いてゐるものなら、必らず月に一回づゝの日蝕と月蝕とが起るのですが、地球の軌道面と月の軌道面とはほんの少し、即ち五度だけ傾いてゐるのです。ですから太陽、月、地球、又は太陽、地球、月と串に刺したやうに一直線に並ぶことは甚だ稀なのです。今までの蝕の現はれたのを平均しますと、一年に日蝕は五回、月蝕は三回位です。かうして太陽、地球、月と一直線に並んだ時月は地球の影にかくされてすつかり見えなくなります。しかし少し傾いてゐる時は月が半分しか見えなかつたりしますがこれを部分蝕と云ひ、すつかり見えなくなるのを皆蝕と云ふの

です。次に太陽、月、地球と一直線に並んだ時には日蝕が起るのですが、月は地球よりもずつと小さいために、月の影によつて地球がすつかり蔽はれて了ふやうなことはありません。只僅かに月の影の終端が地球の一部に達する位ですから、地球全體に太陽の光が屆かぬと云ふことはないのです。ですからその月の影の屆く場所は皆日蝕になり、一時太陽が見えなくなつて眞闇になりますが、その他の部分からは部分

日蝕の圖

月蝕の圖



蝕しか見えないのです。その上地球も月も運動してゐるのですから、間もなくもとの通りになります。月蝕で長い時は二時間位ですが、大抵はもつと短かいやうです。日蝕だと六分から八分位です。」

とお母さんは説明して下さいました。

生命の源

（一）夏休み

暑い／＼夏がやつて來ました。

「もうすぐ夏休みだ。」

と三郎さんは喜びました。夏休みになつたら毎日海水浴が出來ます。三郎さんは海が大好きなのです。それからもう一つの樂しみがあります。それは三郎さんの家へ毎年夏休みになると東京から伯父さんが來ることです。伯父さんは大學生で三郎さんの一番好きな人です。と云ふのは種々珍しいお話や、なつかしい東京の話を聞かせてくれるからです。

「早く伯父さんが來ればいゝなア」

と三郎さんは未だ夏休みにならない中から待つてゐました。

「ね、お母さん。伯父さんはいつ來るのでせう。」

と三郎さんは度々お母さんに聞きました。

「さうね。八月に入つたらすぐ見えるでせう。伯父さんの部屋を綺麗に掃除してをきませうね。」

とお母さんは仰いました。

「今日は七月の二十五日でせう。ちやもうすぐね、僕は伯父さんが大好きです又毎日一緒に泳ぎに行くのよ。しかし僕の方がずつと泳ぎは甘いのですよ。」

と三郎さんははしやいで云ひました。そこへ、

「郵便！」

と云ふ聲がしました。

「郵便が來た。誰からだらう」

と三郎さんは玄關へ走つて行きました。

「お母さん〳〵。伯父さんからよ。」

と三郎さんは一枚の葉書を持つて走つて來ました。

「どうれ、お見せ。」

とお母さんは葉書を受取つて讀み出されました。

「伯父さんはね、今年は少し早くこの月の終りに來ますつて。」

とお母さんは葉書を讀んで了つて仰いました。

「萬歳！」

と三郎さんは思はず叫びました。

「ちや早速お座敷を掃除してをきませうね。」

とお母さんは仰いました。

「僕も手傳ひます。」

と三郎さんは先にたつて片付け始めました。

「珍しいね。三郎さんが先に立つて働くなんて。」

とお母さんは笑つて仰いました。

「えゝ、僕伯父さんが大好きなんだもの。」

と三郎さんは元氣に云ひました。その中にすつかり綺麗にお掃除もすみました。

「あゝ綺麗になつた。これでいつ伯父さんがいらしてもいゝ。」

とお母さんはたすきをはずし乍ら云はれました。

（二）地引網

たうとう伯父さんが見えました。

「伯父さん。僕本當に待つてゐたよ。」

と三郎さんは伯父さんが家に這入るなりさう云つて伯父さんを笑はせました。

「本當に三郎は伯父さん〳〵つて、伯父さんでなければ夏が過せないのですよ。」

とお母さんも笑つて仰いました。

「さうですか。伯父さんも三郎さんに早く會ひたくてやつて來ましたよ。これから又一緒に勉強したり、泳いだりしませうね。」

と伯父さんは仰いました。

いよ〳〵八月になつて三郎さんも今日から夏休みになりました。

「伯父さん。今濱で地引網を引いてゐますよ、行つて見ませう。」

と三郎さんは晝御飯を食べ終ると云ひました。

「あゝ、ぼう〳〵つてなつかしい音がするね。あのやうな音が聞えるといつも濱でお魚がとれた時のことを思ひますよ。」

と伯父さんはほらの音に耳を傾けて云はれました。

やがて三郎さんと伯父さんとは海水帽を冠つて濱へ出かけて行きました。

「今何がとれるの？」

と伯父さんは三郎さんに訊きました。

「あぢがとれるの。」

と三郎さんは答へました。

濱へ行つて見ると大勢の漁師たちが地引網を引いてをりました。

「久しぶりで網でも引いてやらうか。」

と伯父さんは氣輕るに漁師の間に這入つて引き始めました。三郎さんも伯父さんと一緒に引きました。

やがて網が引き寄せられ三四寸ばかりのあぢが、澤山捕れました。

「小父さん少しお呉れよ。」

と三郎さんは漁師たちの集つてゐる中へ割り込んで行つて云ひました。

「よし、いくらでも持つて行け。」

と漁師たちは云ひましたので、三郎さんは何か入れるものがないかと見廻しましたが、何もありませんので、いきなり海水帽を脱いで、それですくひ上げました。

「この小僧は何をすることやら。」

と傍で見てゐた漁師は笑ひましたので、三郎さんはそれを抱えて走つて來ました。

「伯父さん〳〵、こら、こんなに取つて來たよ。」

と三郎さんはほく〳〵喜び乍ら伯父さんに見せました。

「これは澤山あるね、又晩の御馳走だね。」

「えゝ」

と三郎さんは喜び乍ら、

「僕一寸これを家へ持つて歸つて來ますからね、伯父さんはこゝにゐて下さいね。」

と三郎さんは云ひ乍ら家の方へ走つて行きました。

やがて三郎さんが戻つて來て、二人は沖の方へ泳いで行きました。そして充分に泳いで戻つて來ました。

「三郎さん、砂浴びをやらう。」

「えゝ。」

と二人はそれから濱の砂を握つて、お互に自身の身體に砂をかけ始めました。そして身體が温まると又海へ入りました。そして上つて來ると、今度は砂の上に横になつて脊の皮膚を焼くのでした。

「三郎さんは隨分黒いね、といふよりも赤いね。」

と伯父さんは三郎さんの脊を見て云ひました。

「えゝ、まだ〳〵黒い子は澤山ありますよ。」

と三郎さんはそこらで泳いでゐる子供を見やり乍ら云ひました。

「一體いつ頃から泳いでゐるの？」

「僕？　僕は七月になつてからだけれど、小さい子は五月にならない中から泳いでゐるのですよ。」

と云つて三郎さんは笑ひました。

二人は默つて青い空を見詰めてをりましたが、ふと三郎さんは思ひ出したやうに云ひました。

（三）　太陽とはどんなもの？

「伯父さん。僕はこの間からお父さんやお母さんからお月樣の面白いお話を聞いたの。でもうお月樣のことなら何でも知つてゐるの。けれど未だお日樣のこ

とは知らないの。あのやうにかん〳〵輝つてゐるお日様つてどんなものでせう。」

「おや〳〵。海水浴に來る早々質問を出された譯ですか。お月様のことが判れば自然お日様のことを考へるのはもつともなことです。けれど太陽つてどんなものかと聞かれても、太陽とはこんなものであると一口にとても説明の出來るものではありません。太陽があればこそ地球もあり月もあり、我々もかうして生きてをれるのです。太陽がなければ地球もなく月もありません。又我々は生きてゐることが出來ません。ですから太陽は全世界を支配してゐる神様のやうなものです。けれども三郎さんの問ひに答へて太陽とはどんなものかと云ふことを説明しませう。けれども太陽はどんなものか、と云ふ前に、太陽はどうして出來たものであるかと云ふことを説明した方がずつと早く判るでせう。」

と云つて伯父さんは更に話し出しました。

「太陽や地球や月や、その他すべての星が未だ出來なかつた前は、この宇宙は燃えてゐるいろ〳〵なガス體で充ちてゐたと云ふことです。それが時のたつのにつれて次第に澤山の塊に分れ、その塊と塊とが互に引力を及ぼし合つて廻轉し始め、その塊の中心になつた大きなのが太陽で、その周圍を廻轉する小さい塊が遊星で、水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星などがそれです。更にその小さい塊、遊星の周圍を廻るやうになつたのが月で、これを衛星と云ふのです。これを太陽系と云ふのですが、宇宙はこのやうな太陽系が澤山寄り集つて出來てゐるのです。」

と伯父さんは云はれました。

「では伯父さん、この宇宙には未だ澤山の太陽があるのですか。」

と三郎さんは喫驚して聞きました。

「えゝさうですとも、毎夜々々空に現はれる星、あのキラ〳〵と輝いてゐる星は皆な一つの太陽です。あの澤山の星の中には我々の太陽、即ちお日様の何百倍大きいと思はれるものもあるのですよ。」

と伯父さんは云ひました。

「さうですか。僕はお星様とお日様とは全然違つたものだと思つてゐました。しかしどうしてそんなに大きな太陽が、あんなに小さく、只キラ〳〵としか光つて見えないのですか、それが不思議ぢやありませんか。」

と三郎さんは熱心になつて質問しました。

「それはね。非常に距離が遠いからです。三郎さんは遠いところにあるものが近いところにあるものよりもずつと小さく見えることを知つてゐられるでせう。」

と伯父さんは訊きました。

「えゝ知つてゐます。」

と三郎さんは頷きました。

「つまりお日様までは比較的近いが、他のお星様まではもつと〳〵遠いのであんなに小さくしか見えないのです。」

と伯父さんは説明されました。

（四）太陽の大きさ

「ところで伯父さん。お日様の大きさはどの位あるのでせう。」

と三郎さんは思ひ出したやうに訊きました。

「太陽の大きさですか。太陽の直徑は八十六萬六千四百哩です。」

「八十六萬六千四百哩？」と三郎さんは目を見張つて云ひました。

「伯父さん。只八十六萬なんて云つたゞけではどの位の大きさか判らないのでせん。一體それはどの位の大きさでせう。」

「今云つた通り八十六萬……」

「それは判りました。けれど只それだけではどの位の大きさか判らないのです。」

「あゝ成る程さうでせうとも、ところで私たちの棲んでゐる地球はといひますと、やつとその直徑が八千哩しかないのです。つまり太陽は私たちの棲んでゐる地球の百〇九倍もある譯です。」

「地球の百〇九倍？へえ、大きなものですねえ。」

と三郎さんは感嘆しました。

「地球からお月樣までが約二十四萬哩の距離があります。今地球を中心にして月の軌道の通り輪を描いて見てもその大きさはまだ太陽に及ばないのです。」

「さうですか、本當に太陽は大きなものですねえ。そして地球から太陽までどの位の距離があるのですか。」

と三郎さんは訊ねました。

「地球から太陽までの平均距離は九千二百八十九萬七千哩、ざつと九千三百萬哩です。」

「へえさうですか、ぢや地球と月の距離に較べたら大變な異ひですねえ。」

「さうですとも、地球から月までの距離の約四百倍も向ふにあるのです。」

「あまり遠くてどの位の距離か一寸想像出來ませんね。」と三郎さんは云ひまし

た。

「さうですか、こゝに豌豆位の大さのものがありますね、これが地球とすると、それから二寸四分離れたところに粟粒位なのが月、それから四尺離れて夏蜜柑位なのが太陽といふことになります。」と伯父さんは説明しました。

「さうですか、ぢや太陽まで飛行機で行けるものとしたら、何年位で行けるでせうね。」

「恐ろしいことを考へ出しましたね、今太陽に行けるものと假定して、一時間平均六十哩の飛行機で地球を出發したとしますと、それからざつと二百年後でないとつきません。」

「へえ、飛行機で二百年ですか。」と三郎さんは今更のやうに目を見張りました。

「それから伯父さん、太陽も一つの星であり乍ら、どうしてあんなに強い光と熱とを出してゐるのでせうか。」

と三郎さんは續け樣に質問しました。

「太陽は燃えてゐるガス體の塊であることは前にも説明しました。地球も且つてはさうであつたのですが、もうすつかり熱を失つて了つたので最早自分から熱も光も出さなくなつて了つたのです。けれど太陽はまだ〳〵盛に燃えてゐるのです。つまり太陽はまだ火の球です。それから我々に熱と光とを供給してくれるのです。」と伯父さんは云ひました。

「では後には太陽も地球のやうに冷却して熱を失つては了はないでせうか。」

と三郎さんは心配になつて云ひました。

「おや〳〵先え〳〵と考へますね、全く太陽が熱を失つて了ふといふことは考へられないことでもありません。いやわれ〳〵地球が既に星として死にかゝつ

てゐる以上、太陽も亦この運命を追はねばならないといふことは自然な考へ方でせうね。」と伯父さんは云ひました。

「そしてもし太陽が熱を失つた時はどうなるでせう。」

と三郎さんは目を異様に輝して伯父さんの顔を見つめました。

（五）太陽がなくなつたら

「もし今日のやうな太陽がなかつたら、つまり太陽がなくなつたら、第一に困ることは私たちの食物がなくなつて了ふことです。」

と伯父さんは太郎の緊張してゐる様子とは反對に、至極呑氣に話し出しました。

「どうして食べ物がなくなるのですか。」

「それは日光がなくなれば、どんな植物でも一切枯死んで了ふからです。」と伯父さんは云ひました。

「では肉を食つてをればいゝぢやありませんか。」

「ところがどんな動物でも、その食物は直接か間接には、結局植物を食つて生きてゐるのです。」と伯父さんはすぐ答えました。

「肉食動物があるではありませんか、少しも植物を食べない。」

と三郎さんは面白がつて追究して行きました。

「ところが肉食動物は何を食つてゐますか、つまり動物を食つてゐるのでせう。でその食はれる動物は何を食つてゐたでせう、それは植物を食つてゐたとすれば、肉食動物も間接に植物の厄介になつてゐるのです。で植物がなくなり、植物を食ふ動物が亡くなれば、自然肉食動物も滅亡するではありませんか。」

と伯父さんは三郎さんの顔を見て云ひました。

「あゝ成る程さうでしたか。」と三郎さんは始めて合點が行つて頷きました。

「その次ぎには何が起るでせうか、太陽の熱がなかつたら地球はそも〳〵どんな有樣となるでせうか、さうなると水は蒸發してなくなるから雨は降らなくなる、雨が降らなければ河は乾涸びて了ふ、そして海に溜つた水は氷となつて了ふ、さうなると空氣も今のまゝではゐる筈がなく、凝結して一切の生物は滅亡して了ふでせう。」と伯父さんは説明しました。

「ではさういふ時がいつかは來るのですね。」

と三郎さんは心配さうに云ひました。

「さう、來るでせう。」

と伯父さんは平氣で笑ひ乍ら云ひました。

「伯父さん、もしそんな時が來たら、私たちはどうしたらいゝでせう。」

と三郎さんは怖々云ひました。

「アハ、、、三郎さんはよくいろんなことが心配になりますね、太陽がまだ百年や二百年で一度に冷めて了ふと思ひますか、なか〳〵そんなものではありません。今日と二百年前はをろか、五百年、千年前の太陽と、はたしてどれだけ違つてゐるでせうか、千年前から天文學者がゐて、望遠鏡で太陽を觀察を續けてゐたとしても、今日までどれだけの太陽の變化を認めることは出來なかつたでせう。」と伯父さんは平氣で話しつゞけました。

「では何年位で太陽が冷却して了ふでせうか。」と三郎さんは尙不安さうに聞きました。

「それについては古來いろ〳〵な學者がいろ〳〵な説を稱えてをります。即ち

太陽が昔から今日のやうな熱を持ち續けてゐるのは、どういふ譯であらうといふことです。ある學者は太陽が他の星と衝突したり、又太陽に降つて來る流星のために、その熱が補はれるとも云ひ、又ラヂウムが太陽にあつて、太陽の熱を補つてゐるとも云はれてをります。がカントといふ學者は、太陽があれだけの熱を發するのは、太陽がはげしい運動につれて、年々收縮して行くためだと云つてをります。即ち大きなものが小さく縮まらうとする力によつて熱を發するのだと云ふのです。ある學者がこの說に從つて計算したところによりますと、太陽の半徑が一年に百二十呎だけ縮少すれば、その力によつて太陽が一ケ年に發散しただけの熱の量を恢復して充分だといふことです。つまり太陽が年々收縮して行くために、あれだけの熱と光を持ち續けてゐるのです。」と伯父さんは說明しました。

「では太陽も矢張り地球のやうに、終りは縮んで了つて熱の出所がなくなりはしませんか。」と三郎さんは未だ心配でならないやうに云ひました。

「なくなるでせう。ところが先き程も云つた通り、太陽は想像も出來ない程大きなものですから、一年に百二十呎だけ縮小して行つたところで、一萬年以內にどんな强いよく見える望遠鏡で調べて見ても、一向太陽が小さくなつてゐることが判らないといふことです。さういふ譯で太陽が收縮に收縮を重ねて、そのどん詰りまで行つて、それから太陽が冷却して行くまでには、まだざつと一千萬年以上は充分かゝるといふことです。」

と伯父さんは悠々と煙草をくゆらせ乍ら云ひました。

「一千萬年？　それでは伯父さんまだ〳〵現狀は續くのですね。」

と三郎さんはやつと安心して云ひました。

「さうですとも、三郎さんがまだ十邊や二十邊生れ更つて來ても、まだ〳〵今日と殆ど變らない太陽を見ることが出來るでせう。」

「さうですか、それでやつと安心した。」

と三郎さんは本當にやれ〳〵と云つたやうに胸を撫で下ろして伯父さんに笑はれました。

夕の散歩

（一）夕の散歩

お日樣が西に傾いて涼しい風が吹きはじめました。三郎さんは家の周圍やお庭やらをすつから掃き清めて水を打ちました。

「あゝ、これで涼しくなつた。」

と三郎さんは綺麗になつたお庭を見渡してひとりで滿足して云ひました。その時伯父さんは行水をすませて出て來ました。

「やア綺麗になつて涼しさうだ。」

と氣持ちよげに云ひました。

「さア三郎さんも行水を使つていらつしやい。そして夕飯がすんだら散歩しませう。」

「えゝ」

と三郎さんは云はれるまゝにすぐ行水を使ひに行きました。

やがて夕御飯がすむと二人は又海岸の方へ散歩に出かけました。夏の空は益々暗れて大小無數の星が空一面にキラ〳〵と輝いてをります。

「伯父さん御覽なさい。何と云ふ綺麗な空でせう。」

と三郎さんは感慨深さうに云ひました。

「本當に綺麗な空ですね。昔の人があれを不思議に思つてダイヤモンドに譬へたのも無理はありません。」

と伯父さんも空を仰いで云ひました。

（二）地球と兄弟星

「昔の人はあの星をどう考へてゐたのでせう。」

と三郎さんは訊きました。

「昔の人は地球が平かなもので、太陽と月とが交々地球の周りを廻轉してをり、星はいつも動かない小さい天體だと考へてゐたのです。」

と伯父さんは相變らず空を見上げたまゝ云はれました。

「ところが太陽よりもあの星の方が大きいのがあるのですね。」

と三郎さんは面白さうに云ひました。

「さうです。けれど地球と同じ太陽の乾分の星はあのやうな星とは自ら別ですから間違えないやうにしなければなりません。」

と伯父さんは云はれました。

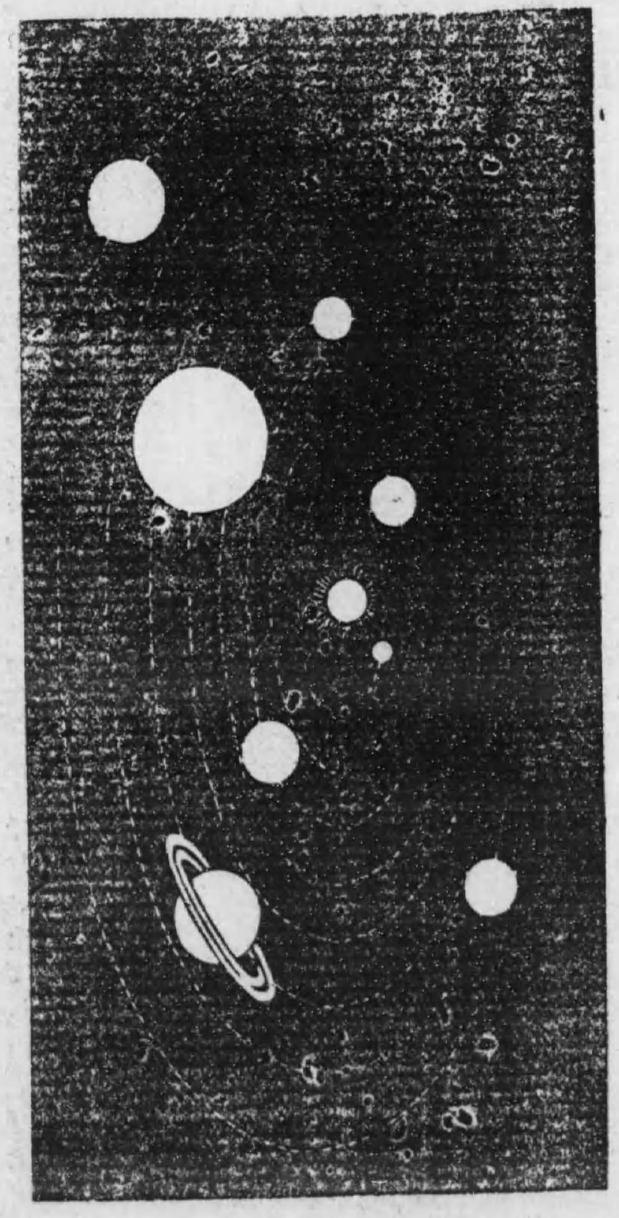
「では水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星などはあれらの星とは違ふのですか。」

と三郎さんは訊きました。

「さうです。太陽の乾分の星は違つた遠さで太陽の周圍を廻つてゐるのですから、お互の地位も變りますし、他の星との位置も變つて來るのです。でありやうにお互の位置を變へない星を恒星と云ふのです。恒星は即ち皆な太陽と同じものです。これに反して太陽の周圍を廻つてゐる星を遊星とか、又は惑星とか云ふのです。地球もその遊星の一つです」

と伯父さんは説明して下さいました。

「ぢや他の遊星には皆な人や動物やその他いろ〳〵なものが住んでゐるの。」



中央太陽から順に外部へ水星・金星・地球・火星・木星・土星・天王星・海王星

と三郎さんは訊きました。

「あア、それはまだよく解らないから斷言する限りでないですけれど、まア棲んではゐないでせう。」

と伯父さんは云はれました。

「なぜですか。」

と三郎さんは不思議に思つて訊きました。

「なぜだつて君！」

と伯父さんは三郎さんの追窮に一寸詰りました。

「だつて地球も太陽の乾分なら、他の遊星もさうでせう、それだのにその一つの地球にだけ動植物が棲んでゐて、他の星にゐない譯はありませんでせう。」

と三郎さんは云ひました。

「いやその譯が大いにあるのです。」と伯父さんは三郎さんの言葉を打ち消して云ひました。

「ではどんな譯ですか。」

と三郎さんは訊きました。

「それを詳しく説明すれば、第一生物がどんなところにでも生活出來るかといふと決してさうでない、生物が生活し得るには、それに適合した條件がなければなりません。」

と伯父さんは云はれました。

「むづかしいですね、どんな條件ですか。」

「つまり生物の生きて行くのに是非必要な空氣がなければならない、ところが例へ空氣があつても、溫度が伴はねば生物が生じない、即ち火のやうに熱いと

ころには絶體に生物は生じませんでせう。又氷のやうに寒むいところにも生物は存在しないでせう。つまりこの宇宙の天體の中で生物の棲んでゐるのは、われ〳〵地球のやうにこの二つの條件を備えてゐるものでないと駄目なのです。」

と伯父さんは説明されました。

「では他の遊星は皆地球のやうな條件を備えてゐないのですか。」

と三郎さんは尙訊きました。

「まアないと思はれます。今一つ一つの遊星について研究して見ますと遊星の中で一番太陽に近いものは水星で、これは遊星の中で一番小さく、いつも太陽の傍をぐる〳〵廻つてゐるので、日出前とか日の入り後二時間位見えるだけで夜中見ることは出來ないのです。隨つて今ではよく觀察されてゐません。」

と伯父さんは仰いました。

「あゝそれでは宵の明星、曉の明星さんはそれですね。」

と三郎さんは云ひました。

「いゝえ、日出、日沒にあたつて、太陽の近くで輝く明星は水星ではなく、その次ぎの金星です。これは遊星の中では無論、すべての星の中で一番光りが強く、見えるのですが、いつも雲に覆はれてゐて、よくその面を見ることが出來ないのです。明星が銀色に強く輝くのは、この白雲が太陽の光りを反射するからです。」

と伯父さんは説明されました。

「ではこれもよく見研めることは出來ないのですね。」

と三郎さんは殘念さうに云ひました。

「さうです、けれどこの二つの星には生物の棲んでゐないと思はれるに充分な

證據があります。」

と伯父さんは云はれました。

「その證據は何です。」

と三郎さんは反問しました。

「先づ水星の大きさから説明しませう、水星は遊星の中で一番小さく、地球の約二十分の一しかありません。そして水星は八十八日で太陽を一週して、その八十八日かゝつて自分が一廻轉するのです、つまり自轉と公轉とが等しいために、いつも半面だけが太陽に照され、他の半面が永久に照されないのです。で照される方の半面は太陽に近いために非常に暑く、他の半面は太陽の光に照されたことがなく、いつも非常な寒さです。無論こんなところに生物があらうとも考へられません。」

と伯父さんは云はれました。

（三）火星の生物

「では金星はどうですか。」

と三郎さんは訊きました。

「金星は地球の八割位の星で見たところ濃厚な大氣に包まれてゐるやうですが、これも太陽に近いために、その熱度は水星に次いで高く、とても生物が存在するとは思はれません。その次ぎは地球ですが、これは我々が現在住んでゐる遊星、その次ぎが火星です。これは色が赤く、速く動くので昔から軍の神と仰がれてゐた星です。この星は地球の八割の大きさがあります。若し地球の外に生物の住んでゐる遊星があつたら、先づこの火星でせう。けれども火星には

空氣が地球よりもずつと少ないと云はれてゐます。ですから空氣中の水分も少なく、雨もさう降らない譯です。ですから植物があつても松のやうな乾燥に耐えるものばかりでせう。」

「でその火星に人が住んでゐたらどうでせう。」

「さうですね。もしゐたとすると火星の人は我々よりも三倍も大きいだらうと云ふ話です。それに空氣が少ないので、人間もその他の肺のある動物はすべて胸が非常に大きいだらうと考へられます。」

「と伯父さんは話し續けました。

「しかしそれは本當でせうか。」

と三郎さんは訊きました。

人がゐるか居ないかと云ふことですか。さアそれはどうですかね、僕は天文學者でないので、これまで詳しく調べてゐませんがね、しかしある學者は火星に人類がゐて、その人類は地球上の人類よりももつと〳〵進歩してゐるといふことを云つてゐます。」

と伯父さんは云はれました。

「さうですか、ではその火星と通信することは出來ないのですか。」

と三郎さんは訊きました。

「なか〳〵そんなことはまだ〳〵出來ませんよ、世界を一週する無線電信さえまだ出來てゐないのですからね。」

と伯父さんは煙草に火をつけて。

「マルコニー無線電信局では時々出所の解らぬ感應があるので、あるひは火星の人類から無線電信がかゝつたのであらうと云はれてゐます。」

「おやさうですか。」

と三郎さんは目を見張りました。

「しかしそれは自然現象かと一時は疑つてゐたさうですが、自然現象でもない、又この火星の面に、時々怪しい光が見えることがあるので、これは人類が大きな焚火をして、その光で地球に通信してゐるのではなからうかといふので、地球でもこれに對してサハラの大沙漠で、數百里四方の焚火をしようといふ、突飛なことを云ひ出した學者もあつたのですが、それだけの燃料がないので駄目になつたといふこともあります。とにかく火星に人類が棲んでゐるといふ說は大分有力になつて來たやうです。」

と伯父さんは說明されました。

「さうですか、その次ぎの星にはゐないのですか。」

と三郎さんは又訊きました。

「火星の次ぎが木星、その次ぎは土星、それから天王星、海王星の順序ですがこの中木星は遊星中一等大きな星で、光りの強いことも亦二番目です。この星は今やうやく固りかけたところで、表面は常に濃厚な大氣で包まれて見ることが出來ないさうです。ですから、動植物などが棲息してゐやうとは信じられません。その次ぎの土星は大きさでは木星に次ぐ星ですが、大變輕く又赤道の邊に鍔のやうな輪があるので、遊星中一等不思議な星とされてをります。天王星は地球の十五倍ありますが、その距離が餘りに隔つてゐるためによく觀察出來ないのです。海王星も矢張りその通りで、遊星中一番端に位してゐます。そして太陽までの距離は實に二十七億九千萬哩、即ち地球と太陽との距離の三十倍も隔つてをります。さういふ風に太陽を隔たることが遠くなれば遠くなる程、

太陽の熱を受ける分量も少なくなり、又その星自身の場合から考へて、これらの遊星に生物が存在するなどは考へられないことです。又太陽から遠くなればなる程、太陽を一週する軌道も長くなつて、土星が太陽を一週するのに要する時間は地球の二十九年かゝります。即ち地球が二十九遍太陽の周圍を廻る間にやつと一度廻つて來るのです。又一等端の海王星と來た日には、實に百六十五年かゝります。もし海王星に人間が生れて來たら、お正月からお正月まで行かない中に死んで了はねばなりません。」

と伯父さんは話つかれたやうに海岸の草の上に腰を下ろしました。三郎さんもそれと同時に伯父さんの横に坐りました。

「その遊星はどの星なのですか。」

と三郎さんは空を仰いで訊きました。

「遊星ですか。遊星は今も云つた通り絶えず太陽を中心にして動いてゐるのですから、いつも恒星を見るやうに一定の所に見ることは出來ません。今晩はあそこに現はれてゐても明日はその位置が異つてゐて、それは天文學者でなければその星の位置を定めることはなか〳〵困難です。又太陽の向ふ側へ行つてゐる間は見ることが出來ないのです。」

と伯父さんは説明されました。

「あゝさうですか。ぢやこの空の星は大抵恒星だと思つていゝのですね。」

と三郎さんは云ひました。

「えゝさうです」

と伯父さんは頷いて見せました。

三郎さんはこれで星や月や太陽のことが判つてすつかりいゝ氣持ちになりま

した。恰度晴れ渡つた空のやうに。

「伯父さん。もう大分遅いやうですねえ。」

と三郎さんは思ひ出したやうに云ひました。

「あゝさうでしたね。」

と伯父さんは懐中時計を出して見て、

「もう九時前です。歸つて寢ることにしませう。又明日の朝眠いですからね。」

と云ひ乍ら伯父さんは立ち上りました。三郎さんもそれについて立ち上つて家の方へ歸つて行きました。

雷の話

（一）魚釣り

「伯父さん。今日は魚釣りに出かけませうよ。」

と三郎さんは朝から伯父さんを誘ひました。

「魚釣り、それは面白いね。しかしこれから朝の中は勉強すると云ふことにしてね。晝から泳いだり遊んだりしませう。」

と伯父さんは仰いました。

「えゝ晝から屹度ね。」

と三郎さんは固く約束してをきました。そして朝の間三郎さんは三郎さんで

學校のお習ひや宿題をしました。

やがて晝になりました。御飯を食べて了ふと三郎さんは釣道具をお母さんから出して貰ひました。

「さア伯父さん行きませう。」

三郎さんはさう云つて先に立つて出かけて行きました。

濱に行くと小舟が一隻三郎さんと伯父さんとを待つてをりました。

やがて二人は沖に漕いで出ました。

「もうこゝいらでいゝのよ。」

と三郎さんは漕ぐのを止めて釣道具を取り出しました。

「さア伯父さんのはこれ、僕のはこれ。」

と早速針に餌をつけて糸を垂れました。

「おや〳〵、もう魚が餌を引張つてゐますよ。」

と三郎さんは糸を持つたまゝ伯父さんの顔を見上げて云ひました。

「さう。僕のはちつとも引かないね、どうしたのだらう。」

と伯父さんは糸を手ぐつたり伸ばしたりして見ましたが一向手應えがありません。

「やあ釣れた！」

とその時三郎さんは大聲で叫びました。そしてぐん〳〵糸を手繰つて見ます

と大きな鰈が釣れてゐました。

「おや〳〵、三郎さんはもう釣つたのね、大きな鰈だね。」

と伯父さんは羨しさうに云ひました。そして一生懸命に糸を見詰めてゐましたが一向手應えもありません。その中に早や三郎さんは雜魚を三四匹釣つて了

ひました。

「伯父さん。僕はもう五匹も釣つたよ。」

と三郎さんが云ひますと伯父さんは自分の釣れないのに業を煮やして煙草をふかし始めました。

「三郎さんは釣の名人だね。それで御飯の御馳走が出來ましたね。」

と伯父さんは笑ひ乍ら云はれました。

「えゝ、伯父さんは何がすきなの。」

と三郎さんは訊きました。

「僕は鰈がすきだね。」

と伯父さんは大きな鰈をつまみあげ乍ら云はれました。

「ぢやそれを伯父さんにあげるよ。」

と三郎さんは云ひましたが、急に涼しい風が吹いて來ましたので三郎さんは俄かにうろたえ始めました。

「伯父さん。大變よ、夕立が來ます」

と三郎さんは叫びました。そして手早く身支度をして糸を仕舞ひ込みました。

「何だね、夕立位、そんなに狼狽てることはないよ。」

と伯父さんは落着いて云ひました。

「だつて風が吹きますよ、風がひどいと浪が荒れますからね。そしたら舟が覆りますよ」

と三郎さんは云ひました。

「舟が覆る？　それは大變だ。」

と伯父さんは急にあわてゝ櫓を漕ぎ始めました。その時はもう天の一角に起つた夕立雲は二人の頭の上の方まで來てをりました。

（二）雷だ！

二人が一生懸命になつて舟を岸に漕ぎつけやうとあせつてゐる中に、次第々々に風は強くなり、波は荒くなつて行きました。二人が一生懸命に漕いでも漕いでも舟は又しても波にさらはれて後へ引き戻されます。

その中に風は益々強くなり大粒な雨が瀧のやうに二人の上に降り注ぎました。

「伯父さん、大丈夫でせうか。」

と三郎さんは流石子供心に恐ろしくなつて、一生懸命櫓にかじりつきました。

「何！大丈夫だ。一生懸命に漕いで。」

と伯父さんは顔を青くしながらも、一生懸命に漕いでをりました。三郎さんも死にもの狂ひになつて漕ぎました。しかし二人はどうしても岸に寄りつくことは出來ませんでした。それは餘り浪が荒れてゐるものですから、岸に寄せようと思つても、すぐ後に引き戻されるからです。

やがてゴロ〳〵と大きな雷が鳴り響きました。ピカッ〳〵と光る電光が二人の目を射ました。

「やつ雷だ。」

と大の雷嫌ひの三郎さんは、舟の中にうずくまつて顔を伏せて了ひました。

「三郎さん〳〵何が恐ろしいのだ、しつかりし給へ、雷よりも浪が恐ろしいよ、用心だ、そら大きな奴が來た。」

と伯父さんが叫ぶや否や、大きな浪が二人の乗つてゐる舟を巻き上げて岸へ打ち上げて了ひました。

「それ！今の中だ！」

と伯父さんは夢中で叫んで舟を飛び出しました。三郎さんもそれに續いて飛び出しました。そして手早く舟繩を引張つて、浪が引いてゐる中に小舟を救ひ上げました。

そして二人は命からゞ〳〵丘の小舍をめがけて驅け込みました。

「伯父さん、危なかつたね。」

と三郎さんは命拾ひをしたやうにほつと太息をついて云ひました。

「本當に魂消た、も少しのことで大變な目に遭ふところだつた。」

と伯父さんはやつと救かつて笑ひました。けれど三郎さんは笑ふどころではありませんでした。三郎さんが嫌な〳〵大嫌な雷樣が相變らずぐろ〳〵と頭の上で鳴つてゐるのですから。

「三郎さんはそんなに雷が恐ろしいのかね。」

と伯父さんは三郎さんの樣子を見て笑ひました。

「え、僕雷樣が大嫌なの。」

と三郎さんは伯父さんに笑はれて、耻しさうに云ひました。かうしてゐても今にこの小舍へ雷が落ちやしないかとびく〳〵してをりました。

「何がそんなに恐ろしいことがあるものぢやない。滅多に落ちやしないから。」

と伯父さんは三郎さんを慰めるやうに云ひました。三郎さんは伯父さんが平氣な顏をしてゐるので、いささか元氣を回復しながら云ひました。

「しかしこの向ふの家へ去年雷が落ちたの、その時その家では皆な寄り集つ

て夕御飯を食べてゐたのだつて、するとガラ〳〵と大きな雷が鳴つたかと思ふとね、向ふの川に橋が架つてゐるでせう、あの橋の向ふに雷が落ちたのですつて、恰度この位な、」

と三郎さんは兩手で丸い輪をこさえて、

「火の球がぐる〳〵〳〵とそれはえらい勢で廻つてゐたのですつて、そしてあの橋を渡つて、田の畔道を傳つて、あの家の松の木の枝が塀から外へ出てゐるので、ひよいとそれを傳つて家の中へ飛び込んだのですつて、そして餘り大きな音がしたので、家の人が喫驚して外へ飛び出したので、耳の遠いお婆さんが、何かと思つて土間へ下りて見ると、雷様が大黒柱に行き衝つて、大黒柱には大きな穴が開いたまゝ、雷様はそこでごろ〳〵轉がつてゐたのですつてそれでお婆さんは喫驚して逃げ出したら、雷様がその後から追かけて來るのでお婆さんは一生懸命に逃げたのですつて、それは怖かつたとそのお婆さんが云つてゐましたよ。」

「アハッハ……あゝ可笑しい、これは堪らない。」

と三郎さんの話を聞いた伯父さんはお腹を抱えて笑ひ轉けました。三郎さんはなぜ伯父さんが笑ふのか解らないので變な顔をして訊きました。

「伯父さん、何がそんなに可笑しいの？」

「何が可笑しいかつて、ウワッハ……。」

と伯父さんは又笑ひました。三郎さんはそれが可笑しいので仕方なく笑つて終ひました。

「ア、可笑しかつた。」

と伯父さんはやつと笑ひ止んで云ひました。

「雷」といふものはそんなものぢやないよ。」

「ぢや違ふの？」

と三郎さんは不審に思つて聞き返しました。

「異ふとも、雷といふものはそんな火の球でも、ころ〳〵轉がつてお婆さんのあとを追かけるやうなものぢやないよ。」

と伯父さんは又ふき出し乍ら云ひました。

「ぢやどんなもの？」

と三郎さんは訊きました。

「どんなものつて、雷といふものは電氣の作用で起るのだから、そんな形なものがあらう筈はないのです、電氣々々と云ひますが三郎さんは電氣の姿を見たことがありますか、ないでせう、だから雷がそんな火の球の形になつて落ちて來る筈はないのです。解りましたか。」

と伯父さんは説明されました。

「えゝ、それなら雷は一體どうして鳴つたり、落ちたりするのですか、伯父さん。」

「それはね、さつきのやうに雲が澤山出來て、そのあるものには陰の電氣が、他のものには陽の電氣が一杯溜つて、それが接近すると兩方の電氣が一緒になろうとするのです、しかしその間には空氣といふ邪魔物がありますからすぐ一緒になることが出來ないのですが、お終ひには猛烈な勢でその間の空氣を飛び越して、互に交り合ふので、その時に電光と雷鳴が起るのです、これを學問の上で放電と云つてゐます。つまり雷とはこの放電のことです。」

と伯父さんは説明されました。

「その放電の時光つたり音がしたりするのですか。」

「と三郎さんは伯父さんからさう聽かされて、やつと雷の正體が解つて云ひました。

「さうです。電光は電氣が交り合ふ時、その道すじの空氣が強く熱せられるために遂に光りを放つのです。そこの空氣はそれと同時に押し除けられて、一時は稀薄になりますが、反動の強い空氣はすぐ押し返してそこを埋めやうとするその猛烈な熱によつて空氣に大きな振動が起り、音を發するのです、これがまアざつと雷の正體です。」

と伯父さんは仰いました。

「えゝさうですか、僕は又お婆さんの云つたやうな火の塊とばかり思つてゐました。」

と云つて三郎さんは笑ひました。

「これは雲と雲との間に起る放電で、一向我々に害をしませんが、所謂落雷ですね、これは今のやうに電氣を含んだ雲が地面近くに出來ると、その下の地面にはそれと反對の電氣が起つて、その地中の電氣と空中の電氣とが相交はるのが雷が落ちたと云ふのです。」

と伯父さんは説明されました。

「ぢやそれに擊たれたら死にますね。」

と三郎さんは又恐ろしさうに云ひました。

「さう、擊たれたら死にますよ、しかしよく注意してをれば決して擊たれるやうなことはありません。避雷針はそのために用意されたものです。つまりこれは地面に出來た電氣を、避雷針の尖端から徐ろに空中に散らせて了つて、落雷

を未然に防ぐのですが、不完全なものは却つて落雷を誘ふやうなものでいけません。」

と伯父さんは話されました。

「さうですか、しかし伯父さん、僕たちの家のやうに、避雷針のない家ではどうしてゐたら一番安全なんですか。」

三郎さんは心配になつて訊きました。

「ハアハ……餘程雷が氣になると見えるね、それはこんな時には絶對に外出しないこと、又家の中にゐてもなるべく室の中央に腹臥ひになつてゐることです。」

と伯父さんは云はれました。

「それから麻の蚊帳の中にゐると雷に撃たれないと云ひますが、それは本當でせうか。」

と三郎さんは訊きました。

「本當かも知れません。それは麻は電氣には不良導體ですし、又蚊帳をつれば自然と室の中央にゐるやうになるからでせう。」

と伯父さんは説明されました。

「真中にゐればどうして安全なんですか。」

と三郎さんは又訊きました。

「それは假りに屋根の棟に落雷したとしますね、すると電氣は家の柱とか壁とかを通つて放電するからです。第二には絶對に金物を身につけたり、手に持たないことです。」

「何故金物を持つてゐてはいけないのですか。」

「それは金物は電氣を引きつけるからです。十數年前東京市で三十何箇所も落雷があつた時には、運動場にゐた士官學校の生徒が、帽子の徽章から感電して燒火箸を田樂ざしにしたやうに、腦天から爪尖まで燒け爛れた穴があいて死んだり、臺所で庖丁を使つてゐた妻君が擊たれたことがあるのです。」

と伯父さんの説明を聞いて、三郎さんは俄かに冠つてゐた帽子を脱ぎ捨てました。

「アハツハ……恐ろしくなつたと見えるね、又かうして野原などに出てゐて雷雨を避難する暇のない時は、なるべく乾いた地面でも、草の上でもいゝから、ぴつたりと俯臥することです。雨が降るからと云つて傘をさしたり、樹木の下に雨宿りをしてゐたりするのは最も危險ですよ。又野中の一軒家とか、山の頂にゐることも危險です。」

と伯父さんは詳しく説明して云はれました。

「ぢやこの小屋も危險ですね。」

と三郎さんは喫驚して云ひました。

「危險と云へば云へないこともありませんけれど、まア野中の一軒屋でもありますまいから大丈夫ですよ。」

と伯父さんに云はれて始めて三郎さんはやれ〳〵と胸を撫で下ろしました。

伯父さんは暫くして立ち上つて戸を細目にあけて見ますと、雨はもう大分小降りになつて雷も音も追々遠くなつて行きました。

青い空

（一）やあ晴れた！

やがて雨の音も靜まりましたので三郎さんは元氣を出して戸を開けて見ました。するともうすつかり雨は止んで風も納まつてをりました。

「やあ、もう晴れた！」

と三郎さんはすつかり元氣を恢復して叫びました。その時はもう雲の切目から青空を眺めることが出來ました。

「本當にひどい夕立だつたねえ。」

と伯父さんもあとから出て來て未だ荒れてゐる波ざわを眺め乍ら云はれました。

「隨分僕恐しかつた。」

と三郎さんはてれがくしに笑ひました。

「三郎さん顏色つたらなかつたよ。」

と伯父さんは三郎さんの狼狽てやうを思ひ出して笑ひ出されました。

「だつて僕雷樣は大嫌なんですから。」

と三郎さんは眞面目になつて云ひました。

（二）雷の研究

「さう〳〵雷の嫌な人は三郎さんばかりではありませんとも。もつと〳〵雷の嫌な人がありますよ。僕の友人で雷が鳴るとそのあと二日も三日も御飯が咽

喉に通らないと云ふ男がゐるのです。いつだつたか一緒に散歩をしてゐたのです。ところが東京には高架線がありますでせう。その高架線の下へ來ると顔を眞青にして走り出したのです。喫驚してあとを追かけて、どうしたのかと訊いて見ますと、高架線の上を走る電車のゴーと云ふ音が雷のやうだから恐しかつたのだ、と云ふので大笑ひをしたことがあります。」

と云つて伯父さんは話乍ら笑ひ出されました。

「隨分臆病だね。」

と三郎さんも笑ひました。

「三郎さんだつて隨分臆病だから他人のことを笑へませんよ。」

と伯父さんはさつきのことを思ひ出して又笑ひ出されました。

「いやだなア伯父さんは！」

と三郎さんはきまり惡さうに云ひましたがふと思ひ出したやうに訊きました。

「伯父さん〳〵。どうして雷は夏ばかり鳴るの？」

「雷は夏ばかり鳴るものとは決つてはゐませんよ。しかし夏雷の多いのは、夏の空は濕氣が多くて地面が強く熱せられますから、熱せられた處の空氣が激しく昇騰して小さな低氣壓を作るのです。それで空氣が濕つてゐるために雷の鳴る前は何となく蒸暑いでせう。さう云ふ譯で自然に空中電氣が起り易いからです。」

と伯父さんは說明されました。

「さうですか。それぢや冬でも雷が鳴ることがあるのですね。」

と三郎さんは訊きました。

「えゝありますとも、しかし夏程頻繁に起ることはありませんが。」

と伯父さんは仰いました。

「しかしピカッと光つてからゴロ〳〵と鳴るのはどう云ふ譯ですか。」

と三郎さんは訊きました。

「いや音と光りとは一瞬間に、即ち殆ど同時に起るのですがね、光りが先に見えて音があとから聞えますのは、音の傳はる速さは一秒間に三町餘りですし、光りの速力は一秒間に十八萬六千哩と云ふ途方もない速さでせう。ですから假りに十八萬六千哩彼方で光つた電光は一秒間後には我々の目に見えますが、音はそれだけの距離を通つて來るのに約三百六十時間もかゝります。しかしそんな遠いところでは空氣に妨げられて遂に聞えなくなつて了ふのです。ですから光つた時から音のした時間を正確に計ると、今の雷はどの位の遠さの所で鳴つたのか略知ることが出來るのです。」

と伯父さんは說明して下さいました。

「ぢや光ると同時に鳴ると雷が落ちると云ひますがそれは本當ですか。」

と三郎さんは訊きました。

「さう云ふこともあるでせう。何分速力の遲い音が光と同時に聞えたとすると、それは非常に近い處で放電が起つたのです。ですから落雷したとすると、その近處に落ちたのですから昔からさう云はれて來たのです。」

と伯父さんは仰いました。

「しかし夏の夜など雲の崩れかゝつた中から、シュッ〳〵と糸を引いたやうな電光が走つてゐて、一向音が聞えないのはどう云ふ譯ですか。」

と三郎さんは又訊きました。

「それは今も云つた通り非常に高い、遠いところで起るので、空氣が稀薄であつて音も弱いし、音の傳つて來る途中で下方の濃厚な空氣のために妨げられて地上まで達しないのです。」

と伯父さんは話し乍ら乘り捨てにした舟の傍に來ました。

「やあ、伯父さん、折角釣つたお魚がどこかへ行つて了ひました。」

と三郎さんは思ひ出したやうに舟の中を覗き乍ら叫びました。

「どうれ、折角の御馳走をふいにされては詰らないな。」

と伯父さんは舟の中を覗き込んで、

「やあこれは大變な水が入つてゐるね。」

「どうしませうか。」

と三郎さんは伯父さんを振返つて云ひました。

「さうね、二人で舟を覆して水を出しませう。」

「えゝさうしませう。」

と三郎さんと伯父さんとは力を合して、えんやら〳〵と舟の片方を持ち上げ出しました。小さい舟でしたけれど、半分程持ち上げて水を出すのには隨分骨が折れて二人共顏を眞赤にして了ひました。

「おや魚が出て來た。」

と三郎さんは水の流れ出す時、お魚も一緒に流れ出したので喜んで叫びました。

「三郎さんが餘り狼狽てゝお魚を逃がして了つたのかと思つた。」

と伯父さんは伯父さんで、晩の御馳走が戻つて來たので喜びました。

「伯父さん、歸りませうか。」

と三郎さんはやがて云ひました。

「さう歸りませう。お母さんが心配してゐられますよ、屹度、こんな雨の降るのに何をしてゐるのかと思つてね、又雷様に追かけられてゐるのではないかと……。」

「伯父さんは又あんなことを。」

と三郎さんは耻しそうに笑ひました。伯父さんも笑つて了ひました。

三郎さんはお魚を持つて伯父さんと並んで、廣い砂丘を越えて歸つて行きました。

（三）青い空

「伯父さん、さつきまで空一面に雲で包まれてゐたのに、早やこんなに晴れて了ひましたね。」

と三郎さんは空を仰いで云ひました。その時は先程の雲はどこやらへ、影も姿も見えなくなつて、碧空がどこまでも澄み渡つて見えました。

「さうぬえ、日本晴れだね。」

と伯父さんも同じやうに空を仰いで見ました。

「伯父さん、晴れた空はなぜ青いの？空に青い天井のやうなものがあるの。」

と三郎さんは見れば見る程不思議で堪らないのでさう訊きました。

「どうして、空に天井などあつてたまるものですかね、けれど青い理由が解らなければさう思はれるのも無理はないけれど、とにかく空は天井のやうな形のないものであるといふことは、太陽や月が見えたり、夜お星様が見えることを考へて見ても解るでせう。」

と伯父さんは仰いました。

「えゝ、さうですね、すると廣い〳〵宇宙の空間が青い色に見えるのですか。」

と三郎さんは云ひました。

「三郎さんはなか〳〵偉いね、しかし宇宙の空間が青い色をしてゐるとも思はれないことですね。」

と伯父さんは云はれました。

「さうですか、それでは地球の表面から空氣を通して見ると、かう青く見えるのですね。」

「偉い〳〵、三郎さんはよく知つてゐましたね。」

と伯父さんは感歎して。

「本當にさうなんです、もつと詳しく説明しますとかうです。昔は空氣が青いのだと思つてゐたさうですが、さうすればいつどんな晴時でも青色でなければならないけれど、夕燒の空は美しい五色の色で彩られるのはどういふ譯でせうか、それを説明するために少し難かしいけれど、第一に光りといふものがどうして起るか、といふことを知つてをかねば解りません、でそれから説明すると、宇宙、この宇宙のどこにでも、どんな小さな隙間にでも、例へば空氣空々と一概に云ひますけれど、その空氣もそれは〳〵小さい一つ〳〵の分子の集合ですが、その小さい〳〵分子と分子との間にでも、エーテルといふものが漲つてゐるのです。これは普通の狀態では人には全く感じないのです、例へば空氣が我々にあるものか無いものか解らないやうに、色も香も手觸りもないものですが、たゞ目の神經に接してゐる處がひどく振へると、光といふ感じが起るのです。そしてすべて高度に熱したものはその周圍のエーテルを振はせるのです、とこ

ろがエーテルといふのは非常によく振動が傳はるものですから、それが傳ばつて目に接したエーテルまで振動して、こゝに光の感じが起るのです。太陽の光が我々の目に感じるのもこの原理です、解りましたか、これはなか〳〵難かしいですが、太陽の光が白色そのものでなく、虹に現はれる七色の光の混合したものであることは、學校で習つたでせう。同じ太陽から發射される光が、どうしてかう種々の色に分れてゐるかといふと、それは太陽の周圍のエーテルの振え方の相違から起るのです、即ち虹の赤色に近い色の光ほど振へ方が大きく、紫に近よる程小さく振へるのです。これで光のことは大抵解りましたね、それから愈々本論に入るのですが、學校の教室などで、硝子窓から射し込む光線のあたる所だけ、塵埃がまう〳〵と立つてゐることがありませう、あの塵埃はその處だけにあるのではなく、その室のどこにもそれと同じ位あるのですが、只光線に照されないから見えないのです。これと同じで大氣中、この空氣の中にも澤山の微細い〳〵塵埃が澤山浮んでゐるのです、それは誰が考へても解るやうに、上の方は粒が小さく、下の方ほど粗いのです。そこで太陽の光が上方の細かい塵埃に來た時、振への小さい紫がかつた光りはそれにあたりますが、振への大きい赤に近い光は抜けて行つてしまふのです。さうして塵埃にぶつかつた紫に近い光は、四方八方に反映して我々の眼にもそれらが集つてくるのです、ですから空は紫に近い青色に見えるのです、どうです、少し難かしいでせう、けれど解りましたか。」

と伯父さんは説明するのに可成骨が折れたやうな顔をしながら、三郎さんに云ひました。

「えゝ解りました。けれどそれなら紫の外の色はなぜ映らないのですか。」

と三郎さんは訊きました。

「もつとも小さい塵埃を抜け通つて來た赤がかつた光も、下の方へ來れば粗い塵埃にぶつかつて、我々の眼の方へも集つて來るには違ひないのですが、それは極く僅かですから、一番分量の多い青色に消されて了ふのです。」

「ぢや　橙色に染められたあの美しい夕燒の空はどうして出來るのですか。」

と三郎さんは又訊きました。

「あゝあの夏から秋にかけて五色の錦を空に織り出したやうな美しい夕燒、これも全く塵埃と光線の關係からです。この場合には赤や橙などの光の豐富な太陽から眞直に來る光が、粗い塵埃に多くあたりそれが雲に反映してあのやうな美觀を呈するのです。」

と伯父さんがやつと說明し終ると、二人はいつの間にか家の前へ歸つてをりました。

風と雲と雨の話

（一）夕の御馳走

「お母さん只今」

と三郎さんは家へ飛び込んで云ひました。

「まあ伯父さんも三郎さんも二人共どうしてゐたの？」

とその聲を聞いてお母さんは飛んで出て來て仰いました。

「お母さん〳〵。僕たちが沖で釣をしてゐるとね、俄かに夕立が來てそれはそれは恐しかつたよ。浪が荒れて僕舟が覆つて死んで了ふかと思ふと悲しくつて悲しくつて。」

と三郎さんはあまえて云ひました。

「ハアハ……三郎さんは弱虫だなア。」

と伯父さんは又笑はれました。三郎さんはそこに伯父さの居られたのに氣がついて顔を赤くしました。そしてててれがくしに、

「でも僕は怖かつたよ、その上ゴロ〳〵と雷が鳴るのですもの。」

と笑ひ乍ら云ひました。

「けれど二人共今までどうしてゐたの？」

とお母さんは心配して訊きました。

「何あに、雨が降るものですから、小舍の中で休んでゐたのですよ。」

と伯父さんは無雜作に云はれました。

「まアさうでしたか、又浪が荒れるからどうしたのかと思つて、隨分心配して

お父さんに今しがた見に行つて貰つたのですよ。」

とお母さんは安心したやうに云ひました。

「お母さん〳〵、そら大きな雷が鳴つたでせう、あの時僕たちは小舍の中にゐたのですよ、それは怖くつて〳〵、伯父さんに笑はれたの。」

と三郎さんは伯父さんの方を見て笑ひ乍ら云ひました。そして二人は井戸傍で身體を洗つて家に上りました。

三郎さんは釣つて來たお魚をお母さんに見せて云ひました。

「お母さん、今日これだけ釣つたの、そして鰈は伯父さんに上げるの。」

「さうかえよし〳〵。」

「晩の御馳走よ、お母さん。」

と三郎さんは念を押してをいて、三郎さんは自分たちを心配して見に行つたお父さんを迎へに出て行きました。

夕飯の時も今日の恐ろしかつたことを云ひ出して、三郎さんはひとり笑つてをりました。

「それは三郎さんの狼狽てやうたらなかつた。」

と伯父さんは笑ひますと、

「でも伯父さんだつて青い顏してゐたよ。」

と三郎さんは云つて笑ひました。

「しかしまア二人共無事で何よりだつたよ、それはうちでは心配してゐたのだからね。」

と傍からお母さんが笑ひ乍ら口を出しました。

「しかしねお母さん、小舍の中で伯父さんからお話を聞いたの。」

「どんなお話を聞かせていたゝいたの？」
「雷の話」
と三郎さんは言ひました。
「さうかえ、それはよかつたねえ、學問になつて。」
とお母さんは仰いました。
「それから空は青いだらう、その譯も敎へて貰つたの、これは少し難かしかつたけれど。」
「解つて？」
「解つたの。」
「さうか、伯父さんは何でも知つていられるから、よく氣をつけて敎へていたゝくのだよ。」
と傍からお父さんが云ひました。

（二）風の話

夕御飯がすむと蚊くすべをたき乍ら、三郎さんは父さんと椽側に出て涼んでをりました。
「あゝ涼しい風がくる、海の風は實に氣持ちがいゝ。」
と伯父さんは思はず云はれました。
「東京では涼しい風は吹かないの？」
と三郎さんはそれを聞いて云ひました。
「東京でも風は吹くけれど、かう冷めたい風はこない。」
と伯父さんは云はれました。

「なぜなの？」

と三郎さんは訊きました。

「それは何分日中がん〳〵焼きつけられて空氣が温かくなつてゐるから、風が吹いても生ぬるい感じしかないの。」

と伯父さんは仰いました。

「そう、ぢや海岸の風はどうして涼しいの。」

と三郎さんは訊きました。

「それは海上にある空氣は絶えず海水に冷やされてゐるから。」

と伯父さんは云はれました。

「あゝさう。」

と三郎さんは何か考へてゐましたが、急に口を開いて訊きました。

「伯父さん、今日さつと風が吹いて來たと思ふと、俄かに雲が押寄せて來て雷が鳴つたり、雨が降つたりしましたが、どうして雲が出來たり雨が降つたりするのでせう。」

「さあそれはね。」

と伯父さんは鳥渡考へ乍ら、

「どれから先きに説明して行つていゝか迷ふが、第一風から話をしませうね、地球が空氣で全體を包まれてゐることは知つてゐるでせう、第一空氣があるといふことは、自分たちが呼吸して生きてゐるといふことで立派に證明されてゐるのですから、そこでこの空氣がどの位の高さで地球を包んでゐるかは、正確には判らないのですが、百里位まではあると云はれてゐます。そこで空氣ですね、これは略々四と一の割で窒素と酸素とが混つてをり、その他に全體の一

萬分の三ほどの炭酸が入つてゐるのです。更に嚴密に云へば、ネオン、ヘリウム、オゾンなども入つてをりますが、それは極く少量で、精密な實驗の結果でないと解りませんが、その中には多少重いものもあれば輕いものもあつて、上に行くに隨つて輕い氣體の多いことは云ふまでもないことです、これを數字的に云ひますと、即ち地面を距る二十五里の處に行けば、空氣は殆ど水素ばかりで、唯僅かにヘリウムといふ、空氣中に極く少し混つてゐる氣體があるに過ぎないと云はれてゐます。そこで空氣の成分が、地面即ち我々が呼吸してゐる空氣と餘り異はないのはどの邊までかと云ひますと、約二里半位までの高さのうちです。この二里半以下のうちで雨や風や雲や霧等が起るのです。」

と二父さんは說明して下さいました。

「ぢあそれ以上の所では風も雲も雨もないのですね。」

と三郎さんは訊きました。

「さうです、今假りに三萬尺もある山があるとすると、二萬五六千尺から下は雪が積るのですが、それ以上は雪が積らないのです。そこには風も雨もないのです。が實際はそんな高い山はありません。話が脫線しましたがこの高さ二里半あまりの空氣が、熱に逢ふと等しく膨脹するし、冷えるとまた一樣に收縮するのです。今地面が太陽の熱のため溫ためられますと、地面に接した空氣は膨脹して輕くなり、頻りに上に昇るのです。」

と伯父さんは仰いました。

「膨脹するとなぜ輕くなるのですか。」

と三郎さんは又訊きました。

「それは小さいものが質の變化なしに膨れると、その膨れた大きさを切り取つ

て、もとの小さい形にして、もと〳〵の時の重さと比べると、その質が伸びていちぢるしく輕くなつてゐることに氣がつきませんか、例へるとこゝにかき餅があります、そのかき餅を燒くと膨れて來るでせう、お砂糖の入つたものなどは二倍にも三倍にもなるでせう、その二倍にも三倍にもなつたものを、もとの大きさに切つて、もとの重さと比べて見たら、こちらの方がずつと輕くはないでせうか。」

と伯父さんは説明して云はれました。

「判りました〳〵。」

と三郎さんは手を拍つて云ひました。

「さてさうして上方へ空氣が昇ると、そのあとを埋めるために、四方から冷めたい重い空氣がやつて來ます。すると又それが熱せられて上へ昇る、さうして熱せられた空氣は段々と空氣の上へ持ち上げられて、周圍に擴がり下の空氣の上にのしかゝるので、下の空氣はその壓力をうけて、熱せられて上へ昇つた空氣のあとを、一層早く埋めるためにそこで空氣の流れが出來るのです、これは非常な勢で走ることもあります。これが風なんです。解りましたか、このやうに熱せられた部分が上へ昇り、その周圍が下に降るのは、氣體に限らず液體、即ち水などを熱するとこのやうな流れが起るのです、水ならば實驗しようと思へばすぐ出來ます。」

と伯父さんは仰いました。

「どうして實驗するのですか。」

と三郎さんは訊きました。

「それは譯はないことです。鍋に水を入れて火鉢にかけ、水の中へ茶のかすで

も少し入れてをくのですね、すると始め茶のかすは中央に沈んでゐますが、鍋の尻が熱くなると、水の泡と一緒に段々上へ浮び出すのです、が一旦浮んだ茶のかすは表面で四方に散つて沈み、中央へ行つて又浮び上るのです、見たことはありませんか。」

と伯父さんは云はれました。

「見ました〳〵、それなら知つてゐます。」

と三郎さんは云ひました。

「つまりさういふ風にして起るのです、これを對流と學問上で云つてゐます。この空氣の運動が即ち風なんです。」

と伯父さんは説明されました。

（三）雲の話

「それで風はやつと解りましたが雲はどうして出來るのですか、煙突の煙が天に昇つて雲となるのですか。」

と三郎さんは又訊きました。

「煙が？　どうしてそんなことがあるものですか。」

と伯父さんは言下に打ち消しました。

「種々な面白い形をした雲、美しい樣々な彩の雲、雲は一日も同じ形でゐたことはありますまい、これは全く不思議な自然の現象ですね、これを不思議に思はないで見過してゐる子は馬鹿ですよ、この不思議な雲はどうして出來るのでせうか、と云いますと空氣の中にはいつも多少の水蒸氣が含まれてゐるので

すが、その含まれる分量には限りがあつて、それ以上には含むことが出來なく餘分の水蒸氣は液體、即ち水になるのです。しかしこの含まれる分量は、空氣の温度が上れば增加するし、これに反して冷却すれば却つて減ずるのです。それはなぜかと云ひますとね、氣體でも何でもすべて物體は分子といふ顯微鏡でさへも見えない微細い粒の寄り集つたものですから、温度が上れば空氣が膨らんで、なぜ膨らむかと云へば、分子は絶へず一つの點を中心にして前後左右に振動してゐるのですが、熱に逢ふとその振動は激しくなつて、お互に押し合ふために全體に膨み、反對に冷えるとその振動が弱くなつて縮まるのです。で膨むと分子と分子との隙間が大きくなつて、自然に澤山の水蒸氣の分子が入つてゐることが出來るのですが、冷えると分子の隙間が狹くなつて、いくらも水蒸氣が入れないといふことになります。大變廻りくどいやうですが解りましたか。

と伯父さんは説明なさいました。

「えゝ解りました。」

と三郎さんは合默々々しました。

「さうして温度の高い時には澤山の水蒸氣を含んでゐた空氣も、一度温度が下ると、全部はもとのまゝの水蒸氣でゐることが出來ず、押し出されて了ふので、その押し出された水蒸氣はすぐ水滴となるのです。

と伯父さんは仰いました。

「それが雨となつて降つて來るのですか。」

と三郎さんは訊きました。

「それまでにはまだ時間があります。今雲の話をしてゐるのですからね、いゝですか。」

「あゝさう〳〵雲の話でしたね。」

と三郎さんは苦笑しました。

「この場合いきなり大きな水の粒が出來たとすると、それはすぐ雨となつて降つて來る譯ですが、それまでにも一つの手間がかゝるのです。それは凝結した水滴は決して始めからそんな大きなものではなく、小さい〳〵輕い粒なんです、それが澤山集つた固りが即ち雲です。」

と伯父さんは仰いました。

「あゝさうですか。」

と三郎さんは始めて頷きました。

「これで雲のことが大體飲み込めた譯ですがね、雲はあながち高い處に浮んでゐるばかりではなく、非常に低い所、即ち地面の上に出來て、その小さい水滴の一つ〳〵まで見えることがあります。」

と伯父さんは話されました。

「えつ、そんなに低い雲があるのですか。」

と三郎さんは反問しました。

「ありますとも、霧はその雲の地上に現れたものです。」

と伯父さんは云はれました。

「霧が！」

と三郎さんは朝霧の有樣を思ひ出して云ひました。

「さうして雲は水蒸氣を澤山含んでゐる溫かい空氣が、冷たい空氣にぶつかるとか、或ひは冷たい山にぶつかる時に起るのです。又は熱せられた地面から蒸發する水蒸氣を含んだ空氣が、空高く昇つて行つて、冷めたい上層の空氣のた